

中等新讀本 卷一

375.9
Fu10
資料室

41410
教科書文庫
4
810
41-1922
200030
1719

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室
大正十一年二月六日
文部省檢定
中學國語教科書

375.9
Fu10

文學博士藤村作著



大日本圖書株式會社
中等新讀本

發行 大日本圖書株式會社

生徒諸子へ

一 本文中*の記號を附した語句には、卷末に説明註釋を掲げてあります。

一 比較的にむづかしい字、語句等を上欄に摘出して、記憶の便に供してあります。

其の中に、漢字の下の括弧内に示してあるものは、其の漢字の部首で字書を引く時の便宜に設けたのであります。

語尾の變化する語は辭書に出てゐる形で出してあります。

大正十年十月

編者

生徒諸子へ

中等新讀本 卷一目次

目次

二

一	入學……………	一
二	入學報知の文(書牘文)……………	一二
三	立志……………	一四
四	國引……………	一六
五	春の曲韻文……………	二〇
六	飛行機を見る……………	二二
七	日本陸軍……………	二七
八	アレクサンドル大王……………	三三
九	スワロフの勇戦……………	四一

一〇	スワロフの勇戦……………	四七
一一	廣瀬中佐(韻文)……………	五一
一二	松平信綱の幼時(常山紀談)……………	五四
一三	龍卷……………	五九
一四	鱒釣……………	六四
一五	鱒釣……………	七〇
一六	永山彌一郎の最期……………	七五
一七	明 星(韻文)……………	八二
一八	猫の作戦計畫……………	八六
一九	鳥……………	九四
二〇	餅……………	一〇一

目次

三

二一	労働の神聖	一一二
二二	富士登山	一一六
二三	富士登山	一一一
二四	小話三章	一二六
二五	路上の大石	一三二
二六	ペンギン	一三四
二七	ペンギン	一四一
二八	會得	一四八
二九	無言の教訓	一五二



中等新讀本 卷一

文學博士 藤村作 編

一 入學

綺麗に掃除をした机に本立てを置いて、今日買ひ調へて來た教科書を並べて、ちつとその前に坐つて見た。國語・漢文・修身等の和装本や、英語・歴史のクロス本や、ノートブックの中に交つて、一隅を占領してゐる辭書の背の金文字が殊に目立つて、質素な我が机上を賑はしてゐる。インク壺が新たに飾られ

て、筆立てには新しいペンの黄金色が輝いてゐる。貧弱であつた我が机も、遽に豊富になつたやうな心地がする。「僕もこれで愈、中學生だ。斯ういふ考が頭腦の中を流れて、ぢつとしてゐられないやうな愉快さがこみ上げこみ上げして来る。

それでも、我慢してゐると、つひこゝ、數日間の身邊の出來事が、ありくゝと眼の前に浮かんで来る。入學試験の第一日は二十七日であつた。僕は某々君と共に定刻前に學校に行つた。嘗て入學願書を出しに行つた事があつたので、勝手は大體心得て居た。豫て入學志願者が定員の約八倍もあると聞いてを

つたが、行つて見て驚いた。受験者と附添人が、控所から校庭の其處此處まで一杯に集つてゐる。試験は國語と算術であつたが、さして困難だとは思はなかつたが、試験場を出て、友人達と話して見ると、一二答案の不備であつたことを思ひついて不愉快であつたが、しかしそれ位でまさか不合格にもなるまいと思ひかへして家に歸つた。

成績の發表は翌日の午後四時といふことであつた。大丈夫とは思つてゐたが、氣が氣でない。答案の不備な點が残念で堪らぬ。思ひ切つて揭示を見に行つた、某君と一緒にある。僕達の番號は四百臺

であつたから、數の若い方には目もくれず、其處らと思ふあたりを見た。眼は電光の如く飛んで、三百臺から四百臺に移つた。あつた、あつた、僕の番號は鮮かに四百五十六と讀まれた。「占めた」と咽まで出た叫を嚙み殺して某君の方に向つて、「どうだ」といへば、恰も其の時某君は「ある、ある。」と如何にも愉快な調子で叫んだ。二人は「萬歳だ、萬歳だ。」といひながら、周圍を見廻すと、不快さうに掲示を見てゐる父兄もある、眼に涙を浮かべた受験者もある。何かひそ／＼語らつてゐる兄弟らしい人もあれば、晴れやかに笑つてゐる母子もある。僕達は「今度もしつかりやらう。」

といひながら、その中をくぐり抜けて校門を出た。第二日は二十九日であつた。今日は第一日よりは場馴れのした爲か、答案は始めからさら／＼と書けた。學科は歴史と理科であつたが、記憶してゐただけは十分に書いて、落ちついて讀み反した上提出した。試験場を出た後も、大丈夫だといふ自信が心を占領して、僕は暢々した心でゐた。家に歸ると、父が「どうだつた。」と問はれたから、「大丈夫だと思ひます。」といつたら、父は「さうか。」といつて笑つてゐられた。母は「それはまあよかつたね。」といひながら茶菓を出して、勞はつて下さつた。

翌日は穩かな心で成績發表の揭示を見に行つた。今度は容易く自分の番號が見出せた。大抵大丈夫と期してゐたのではあつたが、さすがに嬉しかつた。急いで家に歸つて父母に報告すると、お前の大丈夫もどうかと思つたが、ほんとに大丈夫だつたね。」父も喜んで下さつた。

三十日は體格検査と口頭試験の日である。この日さらに百名ばかり除かれる筈である、油斷はならない。僕は體格には自信があるが、口頭試験といふものは受けた事がなかつたから、何となく心配であつた。愈、口頭試験場に出た。前夜母も心配して、父

に「少し教へて置いて下さつたら如何でせう。」といはれると。父が「夫はよくない。正直に有の儘に答へるがよい。」といはれたことを想ひ出した。第一問は「お前が歴史上で一番崇敬してゐる人物は誰か。」といふのであつた。即座に考へて見た。神武天皇、明治天皇、聖徳太子、楠木正成、菅原道真、豊臣秀吉などが、光のやうに腦中を横切つたが、さて一番といふことになると誰だかわからない。又誰が尤も優れてゐるとも知らない。「えらいと思ふ人は然山澤山ありますが、殊に崇敬してゐる人物はありません。」と正直に答へた。第二問は「お前は將來何にならうと思つてゐる

か。であつた。僕はまだ何にならうと決めた所はない。しかたがないから、何とも決めて居りません。」と、これも有の儘に答へた。この外になほ二三の問答があつたが、僕はすべて正直に有の儘に答へた。家に歸つて、僕は口頭試験には有の儘に答へて、少しも虚言をいはなかつたから、きつと大丈夫です。」といつた。どんな問で何と答へたかと問はれたので、一々詳しく話すと、母は大變心配して、「さう知らぬだの、ありませんだのばかり答へて合格するでせうか。」といはれる。さう言はれると、僕も少し心配になつたが、父は正直に答へたのなら、夫で結構だ。先生が何を

性格

貼附

試験してゐられるのかはわからぬが、そこにお前の性格・品性はわかるやうだ。判定は先生に任せるより外はない。まあ遊べ、遊べ。」といはれた。

四月一日、今日は最後の宣告を受くべき日である。発表の時刻に學校に行つて見た。まだ掲示が出てゐない。人は既に大勢集つてわい／＼言つてゐる。誰の顔を見ても得意さうである。暫くすると、番號を書いた長い巻紙が持出されて、一枚々々貼附される。群集の眼はその表を矢の如く飛ぶ。「ある、ある。」といふ聲、まあよかつた。」といふ女の聲がそこ、こゝに聞える。僕の番號は三枚目の巻紙の中程に麗々と

點檢

讀まれた。勝ち誇つた感じが胸に溢れて、心臓の鼓動の急に高くなるを覺えた。始めから終まで仔細に點檢して見たが、僕等の同窓十五名の中、この最後まで残つたのは、僅かに五名であつた。僕は某々二君と取敢へず母校の先生達に報告しよう、校門を出て直に電車に乗つた。先生達も大いに喜んで、君達がそれだけ合格したのは、我が校の名譽だ。まあ大いに勉強し給へ」といつて下さつた。僕等も大いに愉快であつた。

玄關の格子戸を明けて、「唯今」と威勢よくど鳴つた。聞きつけて母は玄關迄出て来て、「どうでした」といは

れた。「合格でした」といへば、まあそれはおめでたう。どうも『唯今』の威勢がいゝと思つた。とにこ／＼してゐられる。奥へいつて、父にも報告した。一同から「おめでたう。おめでたう」といはれて、僕は何だかきまりがわるかつた。しかしほんとに嬉しかつた。生れて始めて經驗した得意の心持であつた。

思に耽つてゐると、門前に某君の僕を呼ぶ聲が聞えた。急いで門に出て見た。晴れた空に霞がほんのりと懸り、木々の若芽に春の生氣が溢れてゐる、心地よい日よりであつた。某君は「これから一緒に記念の寫眞を撮つて某先生に贈らうぢやないか」とい

撮る

ふ。一議に及ばず賛成して、父母の許しを得た。書齋に入つて袴を著け、壁側に懸けた帽子を取つた。今日買ったばかりの徽章がきら／＼と金色に光つてゐる。

二 入學報知の文

拜啓、小生の中學入學に就いては一方ならぬ御配慮にあづかり難有存じ奉り候。選抜試験の結果は本日發表せられ、幸に合格致し候間、御安心なし下されたく候。本年の志願者は定員の八倍もこれありと承り、試験の結果如何あらんと危ぶみ居

り候ひしが、望外の好成绩を得て、僥倖にも合格者の列に入ることを得候事、全く先生の日頃の御教訓御指導の賜と感謝に堪へず候。わが校よりの志願者十五名中、五名合格致し候。甲君の失敗は一同の意外とする所にて候。多少落膽の様子相見え候ひしが、同窓の慰藉激勵に感じて、來年は是非會稽の恥を雪ぐと、勇み居られ候。先づは、取敢へずこれのみきこえ上げ候。何卒今後とても従前の如く、御指導を賜はりたく、ひとへに願ひ上げ候。時下御自愛のほど祈り上げ候。敬白。

會稽の恥

三 立志

賴山陽が立志論を稿して、「男兒學ばざれば則ち已む。學ばば則ち當に群を超ゆべし。」と喝破したりしは、方に彼が十二歳の時なりき。彼髫鬢の齡を以て、既に此の吞牛の氣あり。其の日本外史を著し、日本政記を著し、日本有數の史家・文章家として、はた國民的詩人として、名聲噴々たるに至りしものは、洵に怪しむに足らざるなり。

志を立つるは即ち宣誓するなり、決意するなり、又大方針を立つるなり、身の方角を定むるなり。人間

髫鬢の齡

吞牛の氣

名聲噴々

洵に

宣誓

行路難

薄志弱行

苟も事理を解する齡に達せば、先づ此の事なかるべからず。司馬相如が「業若し成らずんば、死すとも還らず。」と誓ひたる、其の決意甚だ壯なりといふべし。志を立つる者、必ず強固なる意志を以てせざるべからず。千山萬水、冷く之を踏破し、人生の行路難を苦とせざる精神なかるべからず。薄志弱行の徒は、生存競争の世に立つべき資格を缺くものなり。

志は大なるべし。殊に空想に耽り易き青年時代には、成るべく大いに志を立つるをよろしとす。然れども自己の力をはかり、一家の富を考へ、家族の關係を察し、而して其の間に於て及ぶだけ大いなる志

退嬰

を立つべし。志過大なる時は、失敗を招く憂あり。前後の思慮を缺く妄進は、智者のなすべき事に非ず。退嬰・保守は忌むべきことなり。人は常に向上的進路を取るべし、進歩的態度を失ふべからず。最も正直に、最も勇敢に、最も勤勉に、一意其の志の向ふ所に進むべきなり。

(笹川種郎)

四國引

伊弉諾尊・伊弉册尊がお生みになつた日本は、初程は小さくて足りない處が多かつたのを、子孫の神がだん／＼に修理を加へ給ひて、今の様な立派な

漫

國となつたのである。

出雲の國は取分け小さかつた。極幅が狭くて帶の様であつた。素戔鳴尊の四世の孫に當られる臣角命が、「いかにも是では狭過ぎる。ちと縫ひ足さなければいけない。」と思召し立たれた。

そこで、海岸の巖の上に立つて、何處にか國の「餘り」は無いか。」と、遙に西の方を御覽になると、漫々たる大海を隔てて、彼方に新羅の國が見える。

おゝ、ある／＼。新羅の岬に「國の餘り」がある。あれを引寄せて此の國に縫ひ合せよう。あと、臣角尊は神通力をあらはして、其の新羅の國の出

繋ぐ

代

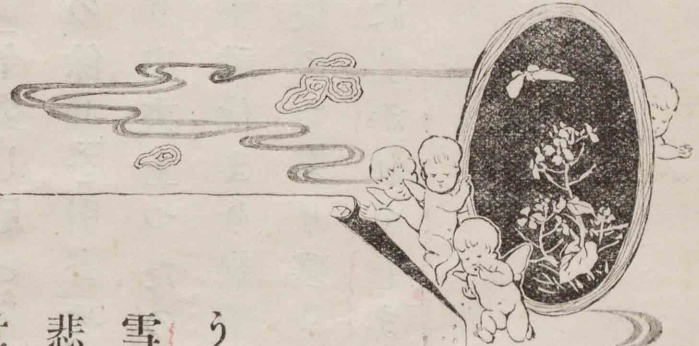
鼻をずばりと切分けて、さて三撚の大綱を打掛けて、其の國の片に結びつけ、えいやえいやと手ぐり寄せ、そろりそろりと引寄せて、國來い、國來い、此處まで來い。と、とうく引附けて縫ひ合されたのが、古津から杵築の岬の邊である。此の時國引の綱を繋ぎ止めた杖が、即ち今の三瓶山といふ山。又其の綱は蘭の長濱になつて居るのである。

まだこれでも出雲の國が小さいので、今度は北の方に「國の餘り」は無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切分けて、又もや三撚の綱打掛けて、「國來い、國來い、此處へ來い。」と引寄

せて接ぎ合されたのが、今の秋鹿郡あたりになつた。「今少し足さう。」と言つて、東北の方を探して、其の國の餘りを引寄せ、とうく、今日の出雲の國がすつかり出來上つたのである。

神代より幾千萬年を経て、明治四十三年になつて、彼のちぎり残りの朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引かれてしまふことになつた。

(日本古事記噺)



五 春の曲

りてや鼓の 春の曲
 雪にうもは、 冬の日の
 悲しき夢は とざさきて
 世ハ春の日と かそりけり。

こぞめ

ひけばおぞめの

春 霞

かすみの幕裁

ひきやちて、

花と花とを

縫ぬ絲は、

萌ゆ

々さ萌え出てし

青 屋かぎ。

霞のまぐを

引きゆけて、

春をうりぶふ

ことなりれ。

花咲畑にふふ

かけをこぼれ。

春のうてふと

ふふべけれ。

うてな

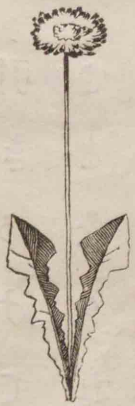
小蝶と花に

こはぶれて

優しき夢を
酔うて羽袖も
春の姿を

とては舞ひ
むらくと、
まひねらし。

(島崎藤村)



六 飛行機を見る

折柄の薄曇りの空、風も事の外烈しくて、都大路は砂塵の烟に目も開いては居られぬくらゐ。

「これではとても昇れまい。」

「なんぼなんでも、こんな日ぢや、ねえ。」

戸外を通る人が斯う話して行く。今日青山原頭に行ふ筈のミス氏の飛行は、到底だめだと皆見切つて居るらしかつた。それほど天候はよくなかつたのである。それでも、私は家の二階から、其方と思はれる方をぢつと見まもつて居た。風はなかく落ちない。氣流は益々悪いだらう。

すると、その中にポーンと一發、目ざした邊に烟火の音がした。私は「さては」と胸を轟かしたが、稍暫くしても飛行機どころか、小鳥の影さへ見えなかつた。然も風は刻一刻と猛り狂ひ立つて來る様子。もう

障子も開けて置けない。

私は諦めて、その儘机の前にもぎつた。すると突

如軒下に、

「ヤア上つた、上つた。」

「とうく、やつたな。えらいものだなあ。アレア

レアレ、速いく。」と叫んだものがあつた。

果然

「すはこそ」と私は再び小窓を開けた。果然、この烈

風の中に、プロペラの音も勇ましく、墨の様に暗い空を昇り行く飛行機の雄々しい姿が見えた。私は實に驚いた、かゝる日によくも飛べるものだ、今更に感心した。

飛行機は見る間に鳶程の小ささになつた。さう

して、やがて非常な勢で眞逆さまに急轉直下した。

と思ふと、再び

機首を擡げて

巧に宙返りを

打つた。一回、

二回、三回、四回

と続けざまに

宙返りして、復



螺旋狀

すーつと高く上つた。それから、今度は螺旋狀にくるくると滑り下つて、その途中に逆轉・横轉の妙技を

幕地

見せて、更に幕地に下つた凄じさ。譬ふるに物も無い。

危機一髪

機體はそれで見えなくなつた。スミス氏は地上幾呎といふ所で舵を取直して、危機一髪の妙術を見せて無事着陸した事であらう。

最初から終まで約十分。全く呼吸をつぐ間も無い。

「ほんとにすばらしいものだなあ。」

「飛行界のレコード破りだ。」

「あれで歳はまだ二十一だとき。」

と、斯ういふ稱讚の言葉が途行く人の口々に話され

た。

風はなほ荒みに荒んで、空一面に塵烟が紅く見えて居た。

(現代女子作文)

七 日本陸軍

日本人は一體に規律を重んずる國民である。彼等は行動動作の嚴格なる規律を愛する。國民の此の美質は、陸軍に於て最も完全に發達して居る。

東京着後數日經てから、余は鴻の臺の陸軍兵舎を訪問した。他に飛行機を組立つる適當な場所が無

いので、この陸軍用地で組立てることになつたのである。

陸軍に關する余の智識は僅少である。余は唯米國の軍隊を観ただけである。併し今兵舎の門を入つた其の瞬間から、余は日本陸軍の精神を感じた。如何なる行動動作でも、すべて所定の命令通りに行はれる。兵士が同一動作を二度行へば、此の二度の動作の間に殆ど寸毫の差もない。行動の敏活、命令に従ふの迅速な事は、ただ驚くべきである。

約二十名程の兵士の一團が、警護のため、又手傳ひのため、余の飛行機の周圍に配置された。見物の群

迅速

集を防ぐため、余は將校に向つて、飛行機のまはりに繩を張つて貫ふ事を依頼した。將校は簡単な命令を下した。直下に四五の兵卒は急いで馳せ去つた。間もなく彼等は繩杭槌を持つて歸つて來た。此の邊に杭を打つてほしいといへば、兵卒は直に仕事を始めた。

各兵卒はこんな場合に、各自其の部分だけの仕事をやるに、前々より訓練されて居ると見える。一人が杭を押へて居れば、一人が之を打ち込む。すると又、他のものが繩を持つて結び付けにやつて來る。第一の杭を打ち込んで居る間に、約十尺を隔て

て、第二の杭を配つて、其の打込まるゝのを待つてゐるものがある。といふ工合に、仕事は片端から迅速に順序よく行はれる。急ぎもしなければまごつきもしない。こんな仕事は、前々幾度もやつた事のあるやりに見えた。ものの一分も経たぬ間に、繩張りの仕事は出来上つた。すると、彼等は、道具と残りの杭を適當な入れ場にもどすために馳せ去つた。間もなく、彼等は元の通りに我等の周圍に歸つて來て、第二の命令の下るのを待つてゐた。

日本の兵卒は、訓練が行届いて、機械の如く巧妙に仕事をするといつただけでは、まだ十分な讚辭では

躊躇
遂行

ない。彼等は完全に訓練されて居るのみでなく、如何なる命令をも、躊躇なく混雜なしに遂行する頭腦を持つて居る。上官の一言には、事の難易善惡に論なく、其の事は遂行されるのである。日本の軍隊に在つては、命令は其の事の完全な遂行を意味してゐる。

兵卒は、我等の作業を見まもりながら立つてゐた。彼等は練兵中ではない、又將校の指揮の下にあるのでもない。併し、何れも靜肅に傍觀してゐる。仲間同士高聲で談話するものさへない。余は思ふに、彼等は最も精細に組立作業の一舉一動を注視してゐ

操縦

たに違ひない。余は他諸國の兵卒は、日本兵卒の如く行動に敏活で、規律正しいものとは思はない。余は飛行機と自動車を取扱ひてゐるが、優良な機械ほど、舵の一進一退に對して、迅速に且つ精確に應ずる。かゝる機械を操縦する愉快は、實に言語に絶したものである。況や、部下にかゝる精銳な兵卒を有する將校の愉快は、實にさこそと想像される。

鴻の臺で、余は陸軍の將校と會食し、卓を挾んで、種の問題に就いて愉快に談話をした。彼等が墻壁を設けぬ快活な質朴な態度は、ただ驚くの外はなかつた。そして何れも飛行機に關する智識を増進す

るに熱心であつた。余は知つてゐる限りは、喜んで教へ、何事にもあれ、御役に立つ事あらば、最善を盡くしてしよると約した。

軍隊生活の第一條件は、簡易生活にありとは、曾て或有名な將軍の言はれたことであるが、今日日本の將校・兵卒の生活を觀るに、彼等は最も實際的な簡易な軍隊生活を營んでゐるものである。(櫛引弓人抄譯スミス日記)

八 アレクサンドル大王

世界の大英雄といへば、私どもは先づアレクサンドル大王を想ひ起すのが通例であります。大王は

マケドニア王フィリポの子で、紀元前三百五十六年に生れ、十八九歳の時に、既に戦功を立て、二十一歳で王位に登り、三十四歳で死ぬるまで、東方諸國を伐ち従へ、僅か十三年間に、世界に類のない大國を建てた英雄であります。

活潑 狩獵 駿馬 悍馬

大王は幼時より、活潑で、大膽で、擊劔狩獵等を好み、駢足が疾く、殊に馬術が上手でありました。或時父王フィリポの許に、駿馬を賣りに來た者がありました。「どんな馬か、一つ試して見よう。」と馬場へ引出して、父王の侍臣達が乗つて見ましたが、非常の悍馬で、誰も之を乗りこなすことが出來ません。それで父

繰る

王は「こんなものは役に立たぬ。」といつて、返さうとします。先程から、傍で此の有様をぢつと見てゐたアレクサンドルは、こんな良い馬を、乗りこなすことの出來ない爲に失ふのは残念だ。といひました。父王は初は此の言葉を氣にも留めず、にゐましたが、度々繰り返していふので、どうして御前はそんなことをいふのか。大人さへ乗れないものを、御前に乗れると思ふのか。と問ひますと、アレクサンドルは、はい、私はあの人達よりは、よく此の馬を扱ふこと

明瞭

が出来ます。

と明瞭に答へました。父王が重ねて、

お、さうか。きつとさうか。それでは御前乗つ

て見るがよい。

といひましたので、

はい、乗つて見ませう。

と、直ちに準備に取掛りました。人々は、アレクサン

ドルが小さいくせに、生意氣なことをいふと思つて、

笑つてゐました。

アレクサンドルは馬の傍に進んで、先づ手綱を取

り、馬の首を太陽の方へ向け變へました。これは、先

叩く

鞭

穩

刻から、馬が自分の影に驚き騒ぐのに氣が附いて居
たからであります。

それから、馬を少し前の方へ引き、少しでも荒れさ
りになると、首を叩いてなだめて置いて、やがて、ひら
りとばかり飛乗りました。そして、次第々々に、静か
に手綱を引きしめて、鞭をあてたり、勵ましたりせず
に、穩に馬をあしらひました。

かくすること少時、漸く馬が從順になり、今は唯驅
け出したい一心になつてゐるのを見て取つたから、
アレクサンドルは、掛聲諸共に、疾風の如く驅けさせ
ました。

凝らす

悠々

喝采

父王や、侍臣達は、どうなる事かと息を凝らして見て居ましたが、アレクサンドルが、馬場を一廻り乗りまはし、悠々と馬を下りるのを見て、一同その馬術の巧みなのに感じ、喝采の聲は少時鳴りも止みません。父王は喜の餘り、涙を流して、彼を抱き上げたといふことでもあります。

此の世界の大英雄は、世界の大學者アレクストテレスを師として、道德政治・文學の事から、醫學の事に至るまで、その教を受けましたが、元來學問が大好きなので、著しい進歩をしました。殊に、ホメロスといふ大詩人の書いた古代の英雄物語を愛讀して、枕邊に

は常に短刀と此の物語とを置き、武士道の精神を養ふには、これほど貴いものはない。といつてゐたさうであります。又、師アレクストテレスを父の如く敬愛して、常に「我に生命を與へたものは我が父である。我を善くしたものは我が師である。」といつて、師恩の大なることを感謝してゐたさうであります。

當時、マケドニアといへば、最も強く、榮えてゐた國でありました。アレクサンドルが此の國の王子に生れながら、普通の富貴の子弟の様に惰弱・暗愚なものにならなかつたのは、全く、彼の志が高く、大きかつたからであります。

惰弱

奢侈
嫌
克己艱難

大王は、父王の權威を笠に著、又、奢侈安逸な生活をするには、大嫌でありました。幼い時から、肉體の快樂を節制する克己の美德を持ち、又、艱難・辛苦と闘つて、大功名を立てようといふ燃ゆるが如き大望を抱いてゐました。

餘地

父王フィリポが、他國を征服したり、強敵に勝つたりした報知が来る毎に、アレクサンドルは子供心に喜ぶと思ひの外、悲しんだといふことであります。それは、父王にまづ世界を征服せられてしまつては、自分の大功名を立てる餘地がなくなることを憂へたのであります。父が如何ほど大事業をなしても、

偉い

その子が、それ以上の大事業をすることの出来ない道理はありませんが、大王が父王の如き偉い人の後を繼いで、富貴の樂しみを極めようとせず、もつと亂れた争のある國を引受けて、大智勇をあらはし、大功名を立てて見たいといふ遠大の志を抱いてゐた事は、この一事を見てもよくわかります。實に大王はその志の通り父王の大事業の後を承繼いで、猶それ以上の大事業を成したのであります。(少年鑑に據る)

九 スワロフの勇戦 一

明治三十八年五月二十七日、我が聯合艦隊が、露國

千古未曾有

バルチック艦隊を破つて、千古未曾有の大勝を博したる日本海大海戦は、史上稀に見る大激戦なり。敵は此の戦に於て其の全艦隊を失ひ、主將虜となるに至りぬ。

悲惨

敵艦隊中、最も壯烈悲惨なる最期を遂げたるものは、司令長官ロジエストウエンスキー中將の旗艦として、艦隊の先頭に在りし戦艦スワロフなり。開戦後幾許もなく、我が主力艦隊より發ちし十二吋砲彈その右舷を撃ちて、装甲板を貫き、内方防禦部に設けられたる假繃帶所に入りて爆裂し、尋いで又、一巨彈後部司令塔に命中して、附近に在りし十餘名を一時

巨(彈)
右舷
装甲板

に斃し、他の一彈は艦尾士官室に爆裂して、大火災を起しぬ。

やがて、戦鬪漸く激烈となるに従ひ、我が砲彈の命

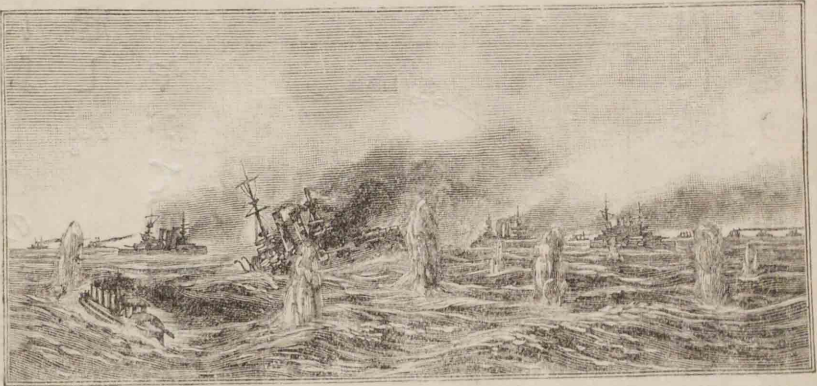


中爆發するもの引きも切らず、舷側は蜂の巢の如く貫かれて、海水艦

碎く
忙殺

内に侵入し、甲板はさゝらの如く碎けて、火災は各所に起り、將士は防水防火に忙殺せられ、死傷は刻々に

伏屍累々
濛々



増加して、伏屍累々の慘狀を呈しぬ。而も砲員は濛々たる煙の裡に立ち、自若として戦鬪を繼續して、少しも其の砲火をゆるめず。折しも我が一弾は後部砲塔に命中して、之を爆破し、爲に一門の十二吋砲は廢砲となり、一門はその根元より折れて、數千貫の砲身は舷外遠く吹飛ばされつ。午後二時五十分頃、また一發の我が十二吋砲彈、前部司令塔を撃つて爆裂

僚艦

するや、塔内の操舵機は忽ち故障を生じ、艦は自ら右方に轉じて、列外に走りぬ。

轟然

かくて僚艦と別れたるスワロフは、兩舷機を加減して、僅かに艦を操縦しつゝ、單獨北方に進航せしが、久しからずして、再び我が主力艦隊の包圍する所となりぬ。十二隻の我が軍艦より發つ彈丸は、雨の如く、霰の如し。三時三十分頃に至り、一發の巨彈は前檣の根元に中りて破裂し、周圍一丈五尺、高さ百尺に餘る鐵檣は、轟然舷側を打破りて、眞倒に海中に倒れたり。尋いで大檣も亦其の上半部を切斷せられ、直徑十尺の二箇の大煙突も、亦見る間に打碎かれて形

慘憺

をも留めず。前後の艦橋は或は碎け、或は焼けて、唯僅かに鐵骨の一部を残すのみ。死傷は益増加して、司令長官、艦長傷つき、副長斃れ、慘憺たる光景、眞に此の世ながらの地獄なり。而も生残れる將卒は、傷を包みつゝ、尙殘砲を發つて勇敢に奮戦す。

塗然

今は残る大砲僅かに二三に過ぎず。持場を失ひたる人々は、なすべき業もなく、三々五々、焼け残れる彼方此方の隅に集れり。數時間にわたる力戦苦闘に、服は裂け、帽は飛んで、手足は血潮に塗れ、唯悄然として一語を發するものもなく、互に相顧みて長歎息するのみなり。日漸く暮れんとす。我が主力艦隊

は、廢殘のスワロフまた爲すなきを看るや、之を激浪の裡に遺し、逃れたる敵艦を追うて北上しぬ。

一〇 スワロフの勇戦 二

軀

是より先、司令長官ロジェストウエンスキーは、身に彈片を受くること兩度、頭足二箇所^ニに重傷を負ひて、人事不省に陥りぬ。されど、艦内は到る處火災起りて、彼が六尺の軀を横たふべき處すらなし。

適、驅逐艦ブイヌイは、スワロフの急を見て近づき來りぬ。幕僚は得たりと直ちに之を招き寄せ、長官を移し乗せんとすれども、端舟は既に悉く破れて、一

刹那

も使用に堪ふるものなし。しかも、かくの如き荒海に於て、動搖烈しき驅逐艦を戦艦の舷側に著けんは、最も危険の事なり。若し誤つて両舷一たび相觸れんか、ブイヌイは忽ち碎けて沈没するを免れず。されど、勇敢なるブイヌイ艦長は、艦體碎けて沈まば沈め、我には覺悟あり。」と決然スワロフの舷側に向つて艦を進めつ。山なす怒濤に揺られて、艦體スワロフに接近したる一刹那、口提督の身體は、投ぐるが如く驅逐艦に移されたり。幕僚並びにスワロフの乗員十餘名は、飛鳥の如く身を躍らしてブイヌイの甲板に飛移りぬ。

茫然

スワロフの乗員は、身の敵前に在るをも打忘れ、少時茫然として煙に消え行くブイヌイの跡を見送りぬ。「長官既に避難したれば、最早心に懸ることなし。生くるも死ぬるも我等ばかり。いでや最後の一戦に、スラブ民族の勇名を日本の海に遺さん。」と我に反れば、情なや艦は益々焼けあふりて、甲板の大部は早灰と化し、残る大砲は僅かに十二斤砲一門あるのみ。夕陽已に傾きて、暮れ行く海上波黒し。折しも我が第四艦隊以下の巡洋艦隊は、南方より攻來り、十四隻の軍艦より發つ速射砲彈は、雨霰の如く甲板に降注ぐ。此の時我が四隻の水雷艇は、疾風の如くスワ

抗戰

閃く

煙焰

翻然轉覆

ロフに向つて突進しぬ。スワロフの將士は、僅かに残る一門の輕砲を以て、尙も最後の抗戰を試みたり。距離は漸次に接近して、八百・五百・三百米突となりぬ。忽ち各艇の甲板に火光閃き、數箇の魚形水雷は、波に泡立てつゝ、スワロフに向つて進む。

轟然艦底に響あり。艦體は忽ち左舷に傾斜し、一しきり猛烈なる煙焰を噴出しつゝ、最後の「ウラー」の聲と共に翻然として轉覆したり。波上に浮かびし巨鯨の如き艦底も次第に沈み、後には殘煙漠として、勇士の跡を弔ふが如く、砲聲全く收りて濤獨り騒ぐ。

(此一戰に據る)

一一 廣瀨中佐

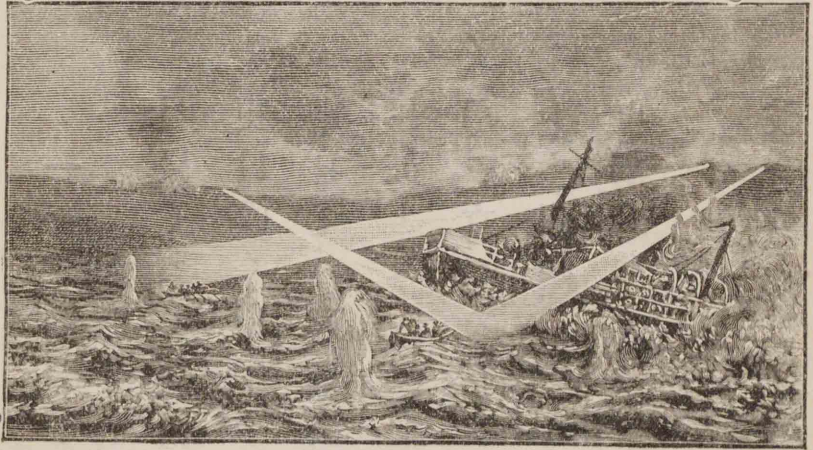
月はくらし、風は寒し。
更けゆく夜半の海原に、
寄せては返る浪の音を
軍鼓ときゝなして、
勇み立つなり、ますらはは。

「七生報國、一死心堅、
再期成功、含笑上船。」

波をつんぎき風を切り

含む

はためく



眞一文字に突入れば、
あびせかくる探海燈
銀河横さまに海に倒れ、
百雷一時にはためく大小砲。

渤海灣頭、旅順口、

これ敵軍ののどくび。

はや我が船を沈めて歸れ。

はや、はや、はや。

見えぬは誰。 杉野兵曹長。

「やよ杉野。 やよく、杉野。」

一たび、二たび、三たび

呼べども呼べども、荒浪の

逆巻きかへるばかりなり。

又もボートに乗移る、

折しも轟く霹靂に、

血煙晴れて残るは主なき舟。

ただ一片の肉ぞ、これ

鬼をもひしぐ益荒男のその形見。

霹靂

句よ

残るはただ一片。されどその紅は、
四千餘萬のはらからの
心に染みて、櫻花
幾千代かけて句はん。
大和心の鏡、此の君。

(獨唱廣瀬中佐)

一二 松平信綱の幼時

出仕

松平伊豆守信綱は、出仕の時も、屋敷に在つても、裏
付きの上下著られし事をなし。常にいはれしは、人の
心は衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずし
ては、忠を盡くす事を得難し。まづ衣服より心を付

嗣(口)

けて恭敬を忘るべからず、我に於てはかくの如く
つとめざれば忠勤をなしがたし」となり。

信綱實は、大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣と
なる。幼名長四郎とぞ申しける。大猷院殿御誕生
ありし時より御家人になされ、御あそび相手にぞ候
ひける。大殿の御寢殿の軒に、雀の巢をくひ子を産
みたるを、若君こなたより御覽じて、長四郎よ、取つて
まゐらせよ。」と仰せけるに、年十一歳なれば、いかにも
かなふまじきよしを申す。「晝は驚きて飛去りもや
せん、よく見置きて、日暮れてこなたの軒に梯子さし
て登り、忍び行きてとるべし。」とありあふ人々勸めけ

梯子

れば、力なく、日暮に忍びのぼりて、やうくつたひ行きけるが、ふみ損じて御つぼの内にとりとおつ。

台徳院殿御刀とらせ給ひ、障子ひらかせ給へば、御臺所ともし火とつて出でさせ給ひ、御覽ずるに、長四郎にてありけり。台徳院殿「汝は何ゆゑ此處には來れるぞ。」と御尋ありしに、「けふの晝、御殿の軒に雀の子産みたるを見て、餘りのほしさに、とりに參りて候。」と申す。「いやく己が心にはあらじ、誰がをしへけるぞ。」とさまさまに御推問あれども、幾度もあらそひぬ。年比にも似ぬ不敵なればとて、大いなる袋の中へおし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給

ひ、事のよしをありのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へ。」と仰せけれども、猶言葉をかへず。夜既に明けて、常の御座に出でさせ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、かれが幼き心にて身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰なりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房たちに仰あつて、朝飯をめして、「たべ候へ。」とて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。

晝ほど入らせ給ひて、又御推問あれども、終に其の言葉を屈せず。御臺所御わび言ありしかば、「さらば重ねてをつゝしめよ。」と仰あつて御赦あり。御臺所に對はせ給ひ、「彼が今の心にて生立ちたらんには、竹

赦す

千代殿のためには、雙なき忠臣にてこそ候はめ。」と事の外によるこばせ給ひけりとぞ。

信綱二代に歴仕して、輔弼の功少からず。諸國の大名の代々奉りし人質をかへし、殉死を禁ぜし事などこれなり。明曆の火災、東都の城郭を始め、ことごとく灰燼となりぬ。去年由井正雪のさわぎありし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みてたちどころにとり行ひし事、皆其の所を得て、ほどなく世の人心も静まり、昔に變らぬ世となりぬる事、いにしへの賢輔にも恥ぢずと申し傳ふるなり。

(常山紀談)

殉死
城郭
灰燼

一三 龍 卷

頃刻
咄嗟
船籍

旋風は往々龍卷を起す。激烈なる旋風は、頃刻に出現して、空中の水分を吸収して、その中心附近に降雨を生ずる、これが所謂龍卷である。若し斯かる旋風が海上に起ると、咄嗟に天上の雲霧を蒐集するのみならず、海水を吸引して、巨大なる水柱をも形成する。

曾て米國*ボストンに船籍を有した噸數一千六百の帆船ワサッチといふ船が、フィリッピン島から砂糖を満載して歸航の途上、ボルネオとセレベスの中

燬く

雲翳

蜿蜒

殷々

濛濛

掃蕩

間のマカツサル海峡に向つて進んで居た。北緯三度の赤道附近の事であるから、炎熱は燬くが如く、天空には一點の雲翳もなく、無風の海面は恰も明鏡の如く輝いて、唯長濤の蜿蜒するばかりであつた。

午前八時三十分の頃であつた。天空も大氣も依然として變りもないのに、風上の低い空に、一團の黒雲が突如として起り、俄に地平線上に擴がり、電光閃閃として輝くと、間もなく遠雷の轟き殷々として聞えて來た。半天に擴がつた黒雲が、次第に低下して四分五裂し、濛濛でも撒き散らした様になつた時、疾風一過、絶大の勢を以て之を掃蕩した。と見ると、其

の中央に歴々として大龍卷を現じ、銀色に耀いて海水の噴騰するのが見えた。

暫くして噴水は止んだが、龍卷は猛烈なる勢を以てワサツチに向つて迫つて來た。轟々たる音響、凄まじいなんと言ふばかりでない。船員は慌てて帆をおろさうとしたが、間に合はない。見る間に吹きまくられて、總帆隻影を留むるものも無い。所載の大砲を以て一弾二弾を送つて見た。第二弾は見事に水柱に命中したが、何の効果もない。第三弾を放たんと準備する時、颶風は驀進して既に船に迫り、船は枯葉の秋風に飄るやうで、將に覆らんばかりであ

颶風

る。

電光の閃きは目を眩し、雷鳴の轟々は耳を聾して、

風は刻々に募り、

雨量は益加はつ

て、檣は見る間に

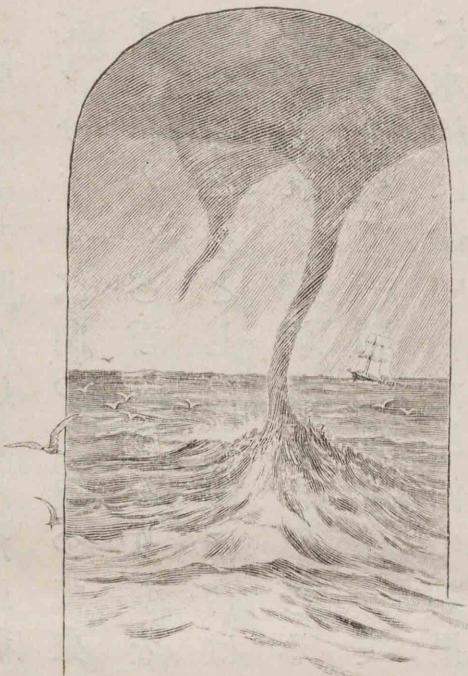
の屈曲して遂に折

龍断し、烈しい音を

立てて仆れてし

まつた。索具の

唸る音、圓材の潰る、響、船員の怒號する聲の喧々噪々たる一分間は、眞に言語に絶した經驗であつた。



斯くして、旋風はワサツチを通過したのである。

嗚呼、五分の前までは美麗なりし三檣の快船も、今は見るかげも無く破壊されて、三檣を失ひ、船橋は一掃され、端艇は多くさらはれ、舷側の上部さへ吹き拂はれ、二十五名の船員中、残るものは僅かに十一名となつてゐた。船艙には海水浸入して、積載した砂糖は濡れ浸つてしまひ、船の動搖につれて舷外に流れ出してゐた。

少時して日光再び輝き、風力も漸く衰ふるに至つたので、残る船員は唧筒を以て水を排除し、帆檣を假製して、航走の準備をしてゐると、風波再び激して、ワ

船艙

唧筒

サツチの運命は危殆に頻したが、恰もよし、一汽船の來るに遭うて、それに救はれて、生殘者は一同瓜哇島に上陸することを得た。

(若林欽)

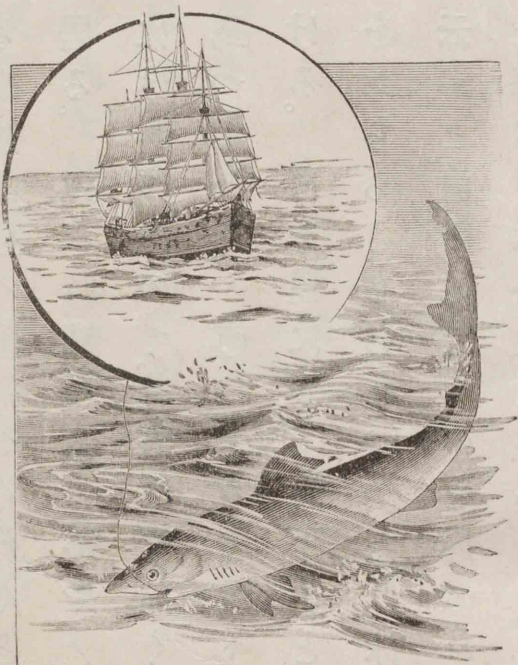
一四 鱒釣 (二)

夏の初、南洋諸島に航海した歸途の事である。馬尼刺を出帆してから五日目と云ふ日に、連日の風で、日本最大の帆船、四本檣バークの大成丸は、三十有餘の帆を展じてゐながら、僅かに呂宋島ルソンを離れた邊を漂うてゐる。僕は此の時、船尾の舷側に飛出して居

鯨猛

る端艇ダウイット吊柱ダウイットの上につくねんと止つて鏽落をやつて居る。此の時、艦トモの方でがやく人聲のするものが耳にはいつたので、其方を振向くと、人集がして何か言罵つてゐる。直に、ダヴィットから滑り下りて駈付ける。日を皿にして見下すと、大きな鱒が一匹、海中をあちらこちらとゆつたり泳ぎ廻つてゐる。鱒と云ふと、直、鯨猛なものと思はれるが、今此處から、綺麗な海水をすかして眺めると、ただ美しい愛らしいといふ感じがするばかりである。身を軽く轉ずる度に、白いつやのある腹をちらりと見せて、日光に映る脊中が眞珠の様な光を放つ。隣に居る友達に水先

一緒



魚を見ろと教へられて、よく見ると、鱒の願の下をちよろちよろと忙しく泳いで居る一匹の小魚がある。一進、一退、右往、左轉、影の形に添ふやうに、小魚は鱒と一緒に動く。小魚が動いて鱒が動くのか、鱒が動いて小魚が動くのか分らぬ。殆ど同時である。かの鋭い眼を持つて、進退自在な鱒が、この水先を要

餌

するとは、一寸不思議である。併し幾ら空腹な時でも、こればかりは食はずに保護して居るのは、何か鱒に弱點が無くてはならぬ。

「早く餌に何でも餌を付けて出せ。」と口々に叫ぶと、老水夫長が「あまり大きな聲を出して騒いでほだ目だ。」と例の落付いた調子で言ふ。見ると、人の好ささうな顔をして、切りと小さな鎖に大きな鉤を付けて、それに鮭の頭を引掛けて居る。暫時は、水夫長の顔と手先を交るくく眺めてゐる。

其の中、釣道具も出来上つたので、鉤をばかりと海の中へ抛り込む。それが、つひ鱒の頭の邊に落ちた

遍

が、びくりともしない。大様なものである。大様ではあるが、鮭の頭は食ひたいらしい。一寸来ては、當つて見る。が、一向腹を返さない。腹を見せなければ食はないのだ。二三遍其處らを廻つては餌に来て、またついと後の方に姿を隠してしまふ。鮭は食ひたいが、後に付いて居る綱（カギ）が氣にくはぬ。」と云ふ様子である。

哨艦

少時見えないので、氣の早い連中は、もう逃げたのか。」と落膽する。「一旦鱒が附いたら、容易に退くものではない。」と一人の水夫がしたり顔に言ふ。「鱒は大抵一匹は來ないが、是は哨艦だらう。」といふのは、海軍

固唾

出身の舵取である。「來た、く。」と叫ぶ者がある。見ると、猛勢に突進して來る。「さては、思ひ返して食ふ氣かな。」と固唾を飲んで見て居ると、また一寸當つたきり、知らぬ顔をしてゐる。其處へ、船長が、ビール腹を抱へる様にして、やつて來て、例の微笑を含みながら、皆、鱒に吞まれて、仕事を止めてはいけません。」と小さいが力の有る聲で、殊に語尾を明確に言ふ。乗組員は、船長の濫言を、他人が目をもいて怒るよりも、恐入つて聽くのが常で、皆、蜘蛛の子を散らすやうに、ばらばらと立去つて、各自の仕事を續ける。僕は、また、ダヴィットに立つて、カーンくと、鱒の事ばかり考

へながら叩く。

一五 鱒 釣 二

業作

午前の仕事が済んで、午後の作業に移つて間もなくである。「鱒が三匹來た。」と言ふから、出て見ると、丁度其の時、朝から附いて居た奴が腹を見せた。「それつと云ふので、綱を手繰つたが、此の時彼は獰猛な性を顯して、非常な力を以て、海から一寸も離れまいと、極力抵抗する。終に、彼の力が優つたのか、綱が切れて釣落してしまつた。張詰めた元氣を凝らした息氣が一度に抜けて、皆落膽する。

詰む

踴る

綸

物有り、海中に踴る。」と見れば、また鱒が引掛つたのである。誰かが「鱒が釣れた。」と大聲に叫ぶと、皆四方八方から飛んだ來た。手擦＊レ、に餘つた者は、檣梯＊リ、にも登つて居る。鱒は、例に依つて惡戰頗る力めて、水から出まいともがく。船ではえい／＼と綱を手繰る。また釣落しやしないか。」と危ぶんで見て居ると、今度は鉤がよく掛つたか、鱒は力盡きて、水から揚る。皆が一度に喝采する。水から出た鱒は、少しも暴れなない。温順しく體重でも測るやうにぶら下つてゐる。二間は十分あらう。輪にした綱を綸＊ンに沿うて下げて、鱒の胴體をくゞり、之を檣梯＊ンに附けた滑車＊ンに通し

跳ぬ

躓く

頸

迸る

て、えい／＼上げると、急に猛烈な勢で暴れ出した。最後の力戦を試みるのであらう。もうしめた、温順なものだと近寄つた連中は、不意の活動にびつくりして飛退く。鱧は思ふまゝ、其處らを跳ね廻る。危く鱧ひらにはたかれようとした人もある。逃げかけて綱具に躓き、あはや鱧の下に敷かれようとした者もある。皆顔色を變へて迷惑ふ。「吾が最期を見よや」と、鱧は愈、其の威を逞しうする。併し、さう何時までも暴れさせては置かれぬ。氣早の連中は、キヤプスタン、バーを振つて頸部を亂打する。鮮血がさつと迸つて、甲板をから紅に染める。實に慘憺たる

曳(目)く

瞬間

光景である。大なる物の死は、小なる物の死よりも、一層悲惨な感じを與へる。終に數名で胴體をくつた綱を曳いて、賄所の横まで運ぶ。鱧は何と思つたか、ぢつとして少しも動かなくなつた。意氣込んで振上げた棒が、空中で立竦む。ちと薄氣味悪く思つたのであらう。それも瞬間。三四人が聲をあはせて、頭部をめがけて力一杯にうちおろす。が、びくりともしない、これに安心してまた試みる。更に、動く氣色がない。眠る様に、段々弱つて行く。水夫長は、時到れりと腰にしたシキナイフを取つて、柄も通れ。と其の腹に突立てて一文字に引く、鱧は其の

臟腑

辟易
抑ふ

大きな體を僅かに動かした。覺悟を極めた鱧の死は、美はしくも、また痛はしい。臟腑を引出して、バケツで海水を何杯となく打掛け打掛け、鮮血を洗へば、生臭い風が強く鼻を打つ。水夫長は平氣なもので、腹を綺麗に洗ひ、左右の鰭を拂ひ、更に刀を持ちかへて、背の鰭を半分切り掛けた。鱧は此の時猛然として暴れ出した。驚いて一度に皆が手を引く。彼は轉々として甲板上を轉び廻る。腹中已に空しく、人間にしては手足に當る左右の鰭は切斷されながら、尙、人の近づくを許さないのである。これに辟易して、二三人が恐るゝ體を抑へて、漸く背鰭を切落し

面影

溶く

た。鱧はこれから動かなくなつた。

少時して來て見たが、鱧は面影も留めず、其の雪の様に白い生きゝとした肉は、大きな鉢に積上げられて、傍では、賄長が西洋辛味を溶いて居た。さきに、太洋を我が物顔に泳ぎ廻つて居た鱧も、今頃は釜中の狭きをかこつてゐるであらう。(雜誌ほとゝぎすに據る)

一六 永山彌一郎の最期

征韓論の沸騰した頃、陸軍少佐で永山彌一郎といふ快漢があつた。黒田清隆に、樺太の多事なことを説かれて、開拓大主典を拜命する事になつた。處が、

飄然

間もなく、千島と樺太とが交換されて了つたので、彼は官をやめて、飄然と鹿兒島に歸國した。桐野利秋を始め、私學校の兵兒どもは非常に欣んで、前後して邸を訪ねた。何しろ戦雲の動かうとする折柄、永山程の人物が歸國した事は、確に私學校のものに取つて、頼もしかつたに相違ない。彼等は、やがて旗上げの節の一方の大將にと、私に期待したのであつたが、永山が切りに鎮臺兵を賞めるので、勢面白からず思ふ様になり、遂に落膽して了つた。彼等の足は漸次永山の邸を遠退いた。然し當人の永山は、至極平氣で邸に籠り、西郷先生も居られるから、私學校の者は

叛旗

無名の暴動はなすまいと安心して、悠々たる日を送つて居た。處が案外にも、西南役の手始めに、彈藥庫を奪ひ、私學校の猛者どもは、政府責問の名義の下に、叛旗を城山風に翻した。「さあ出陣」といふ段になつたが、誰も永山は駄目にして心にもかけぬ中に、別府新助外一人は、永山の人物を惜しんで、彼の邸へ誘ひに行つて見ると、こは意外、門前から玄關がかり、箒目の跡美しく淨められて、家内の道具はちやんと片づけてある。「はてな」と思つて案内を乞ふとのしく、出て來た永山は嚴重な身拵へ、日頃自慢の長い脇差を打込んで居る。別府は先を越されたので驚き呆

れて、笑ひながら

「お、すつかり準備が出来て居るな。皆はお主は往くまいというたが、俺が誘ひに遣つて來た。」

と腰をかけると、永山は突立つた儘、

「どうせ負けるんだ。併し、西郷先生、桐野等始め、朋輩が出かけるのに、俺一人鹿兒島に残つて居ては何が面白い。朋輩が皆死んで了ふのに、生残つたつて仕方がない。到底駄目だぜ。今度の戦は負けるに極つて居る。併し一緒に出かけよう。」

といひながら、平然として武者草鞋の紐を結んだ。別府は永山の言葉を聞いて、しみじみその大器量と情

義の厚さに感服した。先立つ友に別れるが惜しさに、進んで負け戦の首途をするといふのは、何たる美しい心であらう。

永山は私學校黨に馳せ參じて、四番大隊長となり、陣頭に長刀を揮つた。最初は田原坂に向ひ、雨の如き彈丸を浴びて突進數回、幾人かの敵兵を斬つて落した。其の時自身も輕傷を受けた。其のうちに八代口が危いといふので、永山は疾風の如く兵を率ゐて、八代口の身方を助けた。松橋から鏡驛の激戦には、幾度か立派な太刀筋を見せて、部下を勵ましてゐたが、不幸にもこの戦に數創を蒙つた。賊軍の形勢

は日にく、悪く、四月初の生暖い風は、血腥い骸を吹いて、萌え出づる草は、眼のかぎり碧血に染まつて居た。永山は其の時、木山村の或百姓家を借りて本陣にして居つたが、或日の黄昏、裏道傳ひに、のしくと歸つて來た。

春晝の日は薄く影つて、戦塵屢、來り掠むる木山村の風物は、轉、凄愴の感が深い。身に數箇所の手傷を負ひ、碧血を浴びた彼永山彌一郎は、物凄い血刀を提げたまゝ、本陣に充てた此の農家の門口からは入つて來た。家内の者の驚くのを尻目にかけて、ずつと座敷へ打通つた永山は、主人の老爺を呼んで、内懷

慇懃

を探つて、ぎくつと其處へ一封の金包を取出して、慇懃に語り出づるには

「おれは今から切腹する。この家に火をかけて、骸と一緒に焼いて了ふから、氣の毒であるが、この金で新しく家を建てて貰ひたい。今となつては何も残り惜しい事はない。仕方がない。種々世話になつて濟まなかつた。」

と自若として、胸寛ろげて、屠腹の用意に取りかゝつた。主人の老爺も今更どうすることもならず、言はるゝ儘に金包を貰ひ、大切な品を一纏めにして、家族を連れて住馴れた家を離れた。

程なく濛々たる火焰は、藪蔭の淋しい農家を包んで、時ならぬ火の手は四隣を騒がした。硬骨漢永山彌一郎は、かうして木山の露と消えたのである。彼は鹿兒島を出發する時、既に歸らぬ命一つを投げだしてかゝつたのだ。名もなき農家の家の棟と共に、灰燼となつた彼の最期は、實に潔いことではないか。當時暫く彼の最期は分明しなかつたが、程經て農家の老爺が顛末を届出たので始めて其とわかつて、魂は鹿兒島へ合祀さるゝ事となつた。(岡本柳之助)

一七 明星

浮かべる雲と身をなして、
あしたの空に出でざらば、
などかは知らむ、明星の
光の色のくれなゐを。

朝の潮と身をなして、
流れて海に出でざらば、
などかは知らむ、明星の
清みて哀しききらめきを。
なにか戀ひしき、あか星の

空しき天の戸を出でて、
いとしも遠きほとりより、
人の世近くおり來るは。

朝の潮のあさみどり、
水底深き白石を
己が光に透かし見て、
朝の齡の數よむか。

鳥啼く山の谿川の
淺瀬にうつる東雲を

めでしる

わが故郷とめでしれて、
明け行く空や忘るらむ。

小夜には小夜のしらべあり、
夕には夕の音もあれど、
涼しき星の絲の緒に
あしたの琴ぞ静かなる。

紫にほふ朝の空、
きらめきわたる星のうちの、
いとく若き光をば、

名づけましかば明星と。

(藤村詩集)

一八 猫の作戦計畫

休養以外、何等の能もない様にいはれるは癩だ。
吾輩はとう／＼鼠をとる事に極めた。

旺盛

元氣旺盛な吾輩の事であるから、鼠の一匹や二匹は、とらうといふ意志さへあれば、寝て居ても譯わけなく捕れる、今まで捕らぬのは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はる、花吹雪が、臺所の腰障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮かぶ影が、薄暗い勝手用の洋燈の光に白

く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、あらかじめ戰場を見廻つて地形を飲込んで置く必要がある。戦闘線は、勿論餘り廣からうはずがない。疊敷にしたら四疊敷もあらうか。その一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋・八百屋の御用を聞く土間である。竈は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺どうこがびか／＼してゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は、膳ぜん・椀わん・皿ひら・小鉢こぼちを入れる戸棚となつて、狭き臺所をいとど狭く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれずれの高さに

挿鉢

なつて居る。其の棚の下に、挿鉢が仰向けに置かれて、挿鉢の中には、小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸、挿粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠をかけてある。其の籠が時々風に揺れて、大様に動いて居る。是から作戦計畫だ。どこで鼠と戦争するかと云へば、無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからと云つて、一人て待構へて居ては、てんで戦争にならぬ。是に於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から來るかかと、

交叉(又)

書齋

臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大將になつた様な心地がする。下女はさつき湯に行つて、歸つて來ぬ。子どもはとくに寝た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知らない。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は、一段と淋しい。わが決心と云ひ、わが意氣と云ひ、臺所の光景と云ひ、四邊の寂寞と云ひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても、猫中の東郷大將としか思はれない。かう云ふ境界に入ると、物凄いうちに一種の愉快を感じるのには、誰しも同じ事であるが、吾輩は此の愉快の底に、一大心配が横たはつて居

寂寞

るのを發見した。鼠と戦争をするのは、覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出て來る方面が明瞭でないのは、不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには、三つの行路がある。かれらが若しどぶ鼠であるならば、土管に沿うて流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時は火消壺の陰に隠れて、歸り路を絶つてやる。或は溝へ湯を抜く漆食の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫にする。それからと又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が、

蓋
攫む

楯 煤

半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから呐喊して出たら、柱を楯に遣り過ごして置いて、横からあつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、一寸吾輩の手際では、上る事も下りる事も出來ぬ。まさか、あんな高い處から落ちて來る事もなからうからと、此の方面丈は警戒を解く事にする。夫にしても、三方から攻撃される懸念がある。一口なら、片眼でも退治して見せる。二口なら、どりにかかりにかやつてのける自信がある。

論據

併し三口となると、吾輩も手のつけ様がない。どうしたらよからう。どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ひはないときめるのが、一番安心を得る近道である。又法をつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃は、必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

夫でもまだ心配が取れぬから、どう云ふものかと

得策

煩悶

成算

當惑

段々考へて見ると、漸く分つた。三箇の計略のうち、いづれを選んだが尤も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時には、之に對する計がある。又流しから這上る時には、之を迎ふる成算もあるが、其の内どれか一つに極めねばならぬ事になると、大いに當惑する。東郷大將は、バルチック艦隊が對島海峡を通るか、津輕海峡へ出るか、或は遠く宗谷海峡を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實に御察

し申す。

吾輩は斯く夢中になつて智謀をめぐらして居る。夜はまだ浅い。鼠はなかく出さうにない。吾輩は大戦の前に一休養を要する。

(夏目漱石)

一九 鳥

主人の庭は、竹垣を以て四角に仕切られて居る。縁側と平行して居る一片は、八九間もあらう。左右は、雙方共四間に過ぎぬ。今、吾輩のいはゆる垣巡りなる運動は、この垣の上を、落ちない様に一周するのである。これはやり損ふこともまゝあるが、首尾よ

推參な奴

く行くと、お慰みになる。殊に處々に根を焼いた丸太が立つて居るから、一寸休息するにも便宜である。今日は出来がよかつたので、朝から晝迄に、三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。とうとう、四遍くり返した。ところが四遍目に、半分巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ほど向うに列を正してとまつた。これは推參な奴だ。他の運動の妨げをする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、他の塀へとまるといふ法があるものかと思つたから、通る者だ。おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の鳥はこの方を見

嘴

て、にや／＼笑つて居る。次ぎのは主人の庭を眺めて居る。三羽目のは嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食べて來たに違ひない。

吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つて居た。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、なる程勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても、挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるのかと思つたら、右向きから、左向きに姿勢をかへただけである。

逗留

地面の上なら、その分に捨て置くのでないが、如何せん只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、また立ち留まつて、三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つて居ては、足が續かない。先方は羽のある身分であるから、こんな處へは、とまりつけて居る。従つて氣に入れば、何時迄も逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分疲れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝道兼運動をやるのだ。何等の障礙物がなくてさへ、落ちぬとは保證が出来ぬのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つては、容易ならざる

不都合だ。愈となれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。面倒だからいつそさう仕ようか。

敵は大勢ではあるし、殊にはあまりこの邊には見馴れぬ風體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子の様だ。どうせ質の良い奴でないには定つて居る。退却が安全だらう。あまり深入りをし、て、萬一落ちてもしたら、猶更恥辱だと思つて居ると、左向きをした鳥が阿呆といった。次ぎのも眞似をして阿呆といった。最後の鳥が御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に温良な吾輩でも、是は看過

阿呆

鳥合の衆

が出来ない。第一、自己の邸内で鳥輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝる。決して退却は出来ない。諺にも鳥合の衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。

進めるだけ進めと度胸を据ゑて、のそく、歩き出す。鳥は知らぬ顔をして、何か互に話をして居るらしい。愈、癩癩にさはる。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に逢はせてやるのだが、残念な事には、いくら怒つても、のそく、としかあるかれない。漸くの事、先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合せたやうに、

羽搏き

いきなり羽搏きをして、一二尺飛び上つた。その風が、突然吾輩の顔を吹いた時は、つと思つたら、つい踏みはづして、すとんと落ちた。

これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とも、もとの處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾輩の顔を見おろして居る。圖太い奴だ。睨めつけてやつたが、一向利かない。脊を丸くして、少々唸つたが、益だめだ。余が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈しない。考へて見ると無理もない。吾輩は今迄彼等を猫として取扱つて居た。それが悪い。猫ならこのくらゐやれば、慥に應へるのだが、

加之

生憎相手は鳥だ。機を見るに敏なる吾輩は、所詮無益と見て取つたから、綺麗に縁側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動も好いが、度を過すといかぬもので、全身が何となく緊りがない。ぐたくの感がある。加之まだ秋の取りつきで、運動中に照りつけられた毛ごろもは、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。

(夏目漱石)

二〇 餅

吾輩も一寸雑煮が食つて見たくなつた。吾輩は猫ではあるが、大抵のものは食ふ。車屋の黒の様に、

横町の魚屋迄遠征する氣力は無いし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛子の様に、贅澤は無論言へる身分で無い。従つて存外嫌ひは少い方だ。子供の食ひこぼした麵包も食ふし、餅菓子もなめる、香の物は頗るまづいが、經驗の爲澤庵を二切許やつた事がある。食つて見ると妙なもので、大抵の物は食へる。あれは厭だ、是は厭だと言ふのは、贅澤な我が儘で、吾輩などの口にすべき所でない。今雜煮が食ひたいのも、決して贅澤の結果ではない。何でも食へる時に食つて置かうといふ考から、主人の食ひ剩した雜煮が、もしや臺所に残つて居はすまいかと思ひ出し

膠着

たからである。

○臺所へ廻つて見る。今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で、椀の底に膠着して居る。白状するが、餅といふ物は、今迄嘗て口に入れた事が無い。見るとうまさうにもあるし、又少しは氣味が悪くもある。前足で上にかゝつて居る菜つ葉を搔き寄せる。爪を見ると、餅の上皮が引掛つてねばくする。嗅いで見ると、釜の底の飯を御櫃へ移す時の様な香がする。食はうかな、やめようかなと四邊を見廻す。幸か不幸か、誰も居ない。おさんは暮も春も同じ様な顔をして羽根をついて居る。子供は奥座敷で、何と

仰しやる、兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もし此の機をはづすと、來年迄は餅といふものの味を知らずに暮らしてしまはねばならぬ。吾輩は此の刹那に、猫ながら一の眞理を感得した。「得難き機會は、總べての動物をして、好まざる事をも敢へてせしむ。」

吾輩は實をいふと、そんなに雜煮を食ひたくは無いのである。否、椀底の様子を熟視すればする程、氣味が悪くなつて、食ふのが厭になつたのである。此の時もし、おさんでも勝手口を開けたなら、奥の子供の足音がこちらへ近づくのを聞き得たなら、吾輩は

惜し氣も無く椀を見棄てたらう。しかも雜煮の事は、來年迄念頭に浮かばなかつたらう。所が誰も來ない。幾ら躊躇して居ても誰も來ない。早く食はぬか食はぬかと催促される様な心持がする。吾輩は椀の中を覗込みながら、早く誰か來てくれればいと念じた。矢張り誰も來てくれない。吾輩はとうとう雜煮を食はなければならぬ。體全體の重量を椀の底へ落す様にして、ぱくりと餅の角に一寸許食ひ込んだ。此の位力を込めて食ひついたのだから、大抵のものなら噛み切れる譯だが、驚いた。もう一遍噛み直さうとすると、動きが取れない。餅は魔

盡未來際

直覺

物だなど勘づいた時は、既に遅かつた。沼へでも落ちた人が、足を抜かうとあせる度に、ぶく／＼深く沈む様に、噛めば噛む程口が重くなる。齒が働かなくなる。齒答へはあるが、齒答へがあるだけで、どうしても始末をつける事が出来ない。噛んでも、噛んでも、三で十を割る如く、盡未來際、方につく期はあるまいと思はれた。此の煩悶の際、吾輩は覺えず第二の眞理に逢著した。「總べての動物は、直覺的に事物の適不適を豫知す。」

眞理は二つ迄發明したが、餅がくつつ付いて居るので、毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、

抜ける様に痛い。早く食ひ切つて逃げないとおさんが来る。子供の唱歌もやんだ様だ。屹度臺所へ駈け出して来るに相違ない。煩悶の極、尻尾をぐるぐる振つて見たが、何等の効能も無い。耳を立てたり寝かしたりしたが、駄目である。考へて見ると、耳と尻尾は餅と何等の關係も無い。要するに、振り損の、立て損の、寝かし損である。と氣が付いたからやめにした。漸くの事、是は前足の助を借りて餅を拂ひ落すに限ると考へついた。先づ右の方を擧げて口の周圍を撫で廻す。撫でた位で割り切れる譯のものでは無い。今度は左の方を伸ばして、口を中心と

して、急劇に圓を劃して見る。そんな呪で魔は落ちない。辛抱が肝要だと思つて、左右交るくくに働かしたが、矢張り依然として齒は餅の中にぶらさがつて居る。え、面到達と兩足を一度に使ふ。すると、不思議な事に此の時だけは、後足二本で立つ事が出来た。何だか猫で無い様な感じがする。猫であらうが、あるまいが、斯うなつた日には構ふものか、何ても餅の魔が落つる迄やるべしといふ意氣込で、無茶苦茶に顔中引掻き廻す。前足の運動が猛烈なので、動ともすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に、後足で調子を取らなくてはならぬから、一つ

天祐

所に居る譯にも行かぬので、臺所中、あちらこちらと飛んで廻る。我ながらよくこんな器用に起つて居れたものだと思ふ。第三の眞理が幕地に現前する。「危きに臨めば、平常なし能はざる事をなし能ふ。之を天祐といふ。」

幸に天祐を享けた吾輩が、一所懸命餅の魔と戦つて居ると、何だか足音がして、奥より人が来る様な氣合である。こゝで人に來られては大變だと思つて、愈躍起となつて臺所を駆け廻る。足音は段々近づいて來る。あゝ残念だが、天祐が少し足りない。とうとう子供に見付けられた。「あら猫が御雜煮を食

べて、踊を踊つて居る。」と大きな聲をする。此の聲を第一に聞きつけたのがおさんである。羽根も羽子板も打遣つて、勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬の紋付で、「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書齋から出て来て、「此の馬鹿野郎」といつた。面白い面白いといふのは子供許である。腹は立つ、苦しくはある、踊は止める譯にゆかぬ。弱つた。漸く笑がやみさうになつたら、五つになる女の兒が、「御母さま、猫も随分ね。」といつたので、又大變笑はれた。人間の同情に乏しい實例も大分見聞したが、此の時程恨めしく感じた事は無かつた。

遂に天祐も何處かへ消失せて、在來の通り四つ這になつて、眼を白黒するの醜態を演ずる迄に閉口した。さすが見殺しにするのも氣の毒と見えて、「まあ餅を取つてやれ。」と主人がおさんに命ずる。おさんはもつと踊らせようぢやありませんかといふ眼付で細君を見る。細君は見たいが、殺して迄見る氣は無いので、黙つて居る。「取つてやらぬと死んでしまふ。早く取つてやれ。」と主人は再び下女を顧みる。おさんは、御馳走を半分食べかけて夢から起された時の様に、氣の無い顔をして、餅を擱んでぐいと引く。前齒が皆折れるかと思つた。餅の中へ堅く食ひ込

んで居る齒を、情容赦も無く引張るのだから堪らな
い。吾輩が「總べての安樂は、困苦を通過せざるべか
らず。」といふ第四の眞理を経験して、けろくと四邊
を見廻した時には、家人は既に奥座敷へ這入つてし
まつて居つた。

(夏目漱石)

二一 勞働の神聖

米國が天然の大に加ふるに、人工の大を以てして、
盛んに進歩發展しつゝあるは、ナイヤガラ瀑布に於
て之を見る事が出来る。紐育市に、四十階に餘る高
樓の雲表に聳ゆるのも、この大陸的氣象の一現象に

列強

過ぎぬ。彼等米國人は、米國を以て世界第一たらし
めんことを期してゐる。而して世界に於ける富の
中心たり、又世界の最強國たらしめんと奮闘しつゝ
ある。所謂亞米利加魂はこれである。紐育の市場
が、半ば以上歐洲の相場を支配し、^{*}ウオシントン政府
が屢、世界の列強を動かすことは、十數年來の歴史が
これを證明して居る。二十世紀に於ける米國の未
來は、實に恐るべきものと云はねばならぬ。

米國が此の大を成す所以は、所謂門戶開放の結果
に外ならぬ。米國は歐洲諸國の如く古來の習慣も
無く、階級の制度も無く、唯全土を擧げて、各人の奮闘

富豪(家)

場たらしめて居る。従つて一雙の鐵腕、よく大富豪たるべく、匹夫と雖もよく大統領たるべしとの觀念は、深く米國民の頭腦に印せられて、國民みを活潑勇敢の氣象に富み、進取の精神は到る所に溢れてゐる。此の活潑なる米國の社會に於ける信條は、實に「勞働の神聖」といふ事にある。父兄達に學資を仰いでゐる學生、兒童も、暑中休暇を利用して、自ら金を得る手段を講ずる。巨萬の富を有する者も、坐食の徒と呼ばるゝを恥としてゐる。新聞片手に電車に飛乗り、如何にも忙しさうなのが、彼等の常である。「時はこれ金」の思想は、上は大會社の重役より、下は小僧・職人

信條

坐食

に至るまで、其の全身に充滿して居る。

ナイヤガラの壯觀は、幾萬年の後或は之を見ることを得ざるに至るかも知れぬ。米國の山野は、數百年にして、全く開拓し盡くさるゝ事もあらう。しかし此の勞働神聖主義、時これ「金」の思想は、永久に米國人を支配すべきものであらう。若し米國人にして、たび此の精神を失はば、米國はやがて自滅の外無いではあるまいか。たとひ自滅するには至らぬでも、斯くては、米國は世界に於ける恐るべきものの一つでは無いのである。

(黑板勝美)

二二 富士登山 一

未明

七月三十一日未明、我が富士登山隊は、名古屋停車場を出づ。一行は教師四人、生徒五十人、いづれも草鞋・脚絆の軽々しきいでたちなり。

汽車は參尾の平野を過ぎて、遠江に入る。濱名湖の邊、雨濛々たり。走れる白帆、かゝれる漁船、見るも面白し。大井川・天龍川を打過ぎ、富士川の鐵橋を渡れば、間もなく富士驛につく。時に正午すぎ。

仰げど富士山は雲につゝまれて、影だに見えず。「頂はかしこ。」裾野はああたり。など、とりどりに言合

ひつ。五臺の馬車に分乗して、大宮に向ふ。大宮につきたるは三時半。直ちに淺間神社に詣でて、一行の無事を祈り、大宮亭といふ旅館に宿る。雨は止みたれど、富士の姿は未だ見えず。

明くれば八月一日、まだほのぐらきに宿を出づ。笠を戴き、蘆を纏ひ、金剛杖を手にしたる登山姿のをかしさよ。二人の強力を案内に立てて登りにかゝる。行く程に夜は明け離れ、空は心地よく晴れて、富士の姿雲の上にはあらはれたり。

心あてに見し白雲はぬもとにて、思はぬそらに晴るゝふじのね。

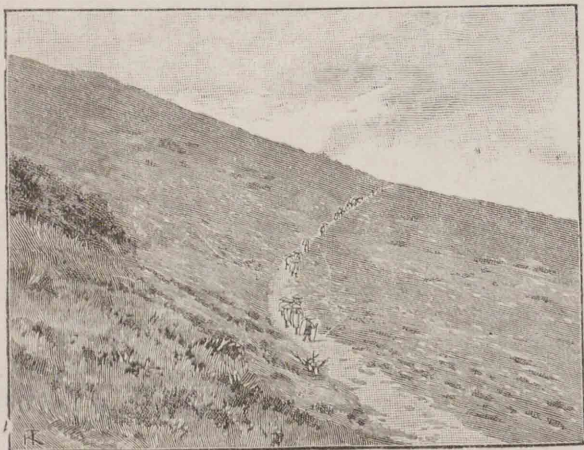
と古人の詠ぜしもうなづかれぬ。萬野原・篠坂・欠巢
畑ほなどいふ所を過ぎて、一合目の休泊所に至る。大



宮よりは三里ばかり。表口
登山案内會社本部ありて、宿
泊券及び頂上に至るまでの
喫茶券等を賣る。これより
は所謂木山にして、櫟の大木
そゝり立ちて、晝猶暗きばか
りのところもあり。二合目
に至れば、骨も冷ゆるばかり
の清泉湧出でて、登山の勞も

峻し

洗ひ去らるゝ心地す。
して、又登りにかゝる。



中食をなし、一時間ほど休憩
二合五勺の馬返しを過ぐれ
ば、次第に峻しくなり、四合目
あたりよりは、焼石のみにし
て、草木は更に見えず。俗に
「毛なし」といふ。五合目より
は六合目、六合目よりは七合
目と、登るに隨ひて路益、急に
疲愈、甚だしければ、節面白き
強力の歌を聞き、或は自ら六
根清淨を唱へなどして、氣を

たゆたふ



の歌も、まことにわれを欺かざるを知れり。

勵ましつゝ、漸く八合目の石室につく。時に午後五時。見下せば四合目以下雲につゝまれて、一面白濛々、これ即ち雲の海の景なり。走る雲あり、たゆたふ雲あり。

ふじのねの麓を出でて行く雲は、

足柄山のみねにゝゝきり。

板葺

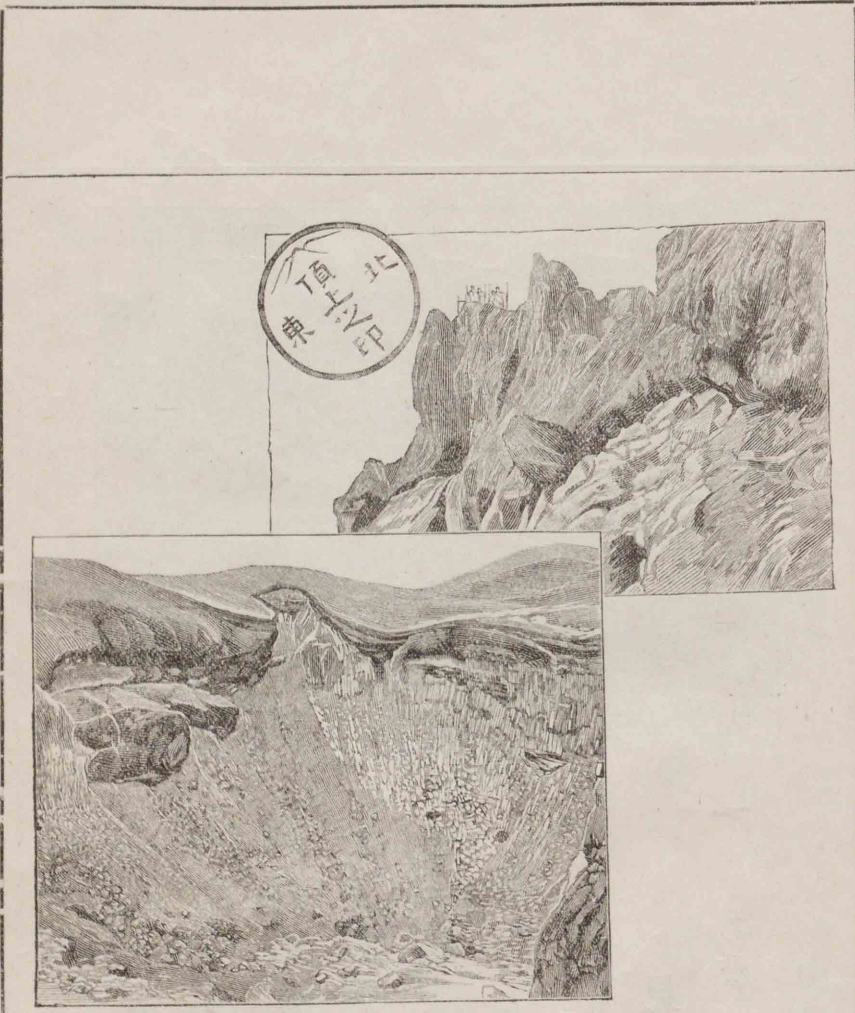
我等は今夜こゝに宿る豫定なれば、直ちに草鞋をぬぎすてて室に入る。室は廣さ二十疊ばかり、四方は石を疊み上げて壁となし、板葺の屋根には數多の石を重ねて、風に吹きさらはれざる用意をなせり。日は早暮れつ、寒さは次第に身に沁むまゝに、中央なる爐を圍みて、室の主のすゝむる夕飯をすまして寝につく。

二三 富士登山 二

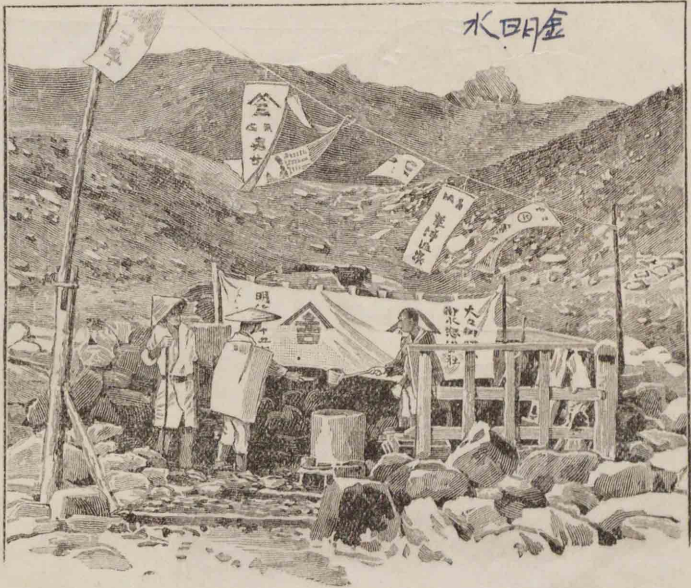
「御來光も間近し。」とあわただしく強力によび起されて、急ぎ朝食したゝめ、室の前なる御來光岩に上り

爛然

て、日の出を待つ。白み渡れる東の空、やがて紅色になり、黄金色になりて、爛然たる光きらめきつゝ、朱盆の如き旭日さしのぼりぬ。顧みれば富士のかけは遠く西にひきて、数十里の彼方に及び、果ては空中高くかゝりて、うす墨の繪の如し。これ即ち御影富士と稱して、稀に見ゆるものなりとぞ。これより上る路は次第に峻しく、九合目もすぎ、最も峻しき胸突八町も過ぎて、漸くにして頂上に達す。浅間神社奥宮を拜し、電報もて一行の安着を學校に報ず。頂上の内部は、舊噴火口にして、これをめぐるを「お鉢めぐり」といふ。われらは左にめぐりて、先づ最高



峯なる劍が峯に上る。海拔三千七百八十米突。あゝ、我はいま日本第一の高處に立てりと思へば、俄に氣も大きくなりたる心地ぞする。見下せば、房總の



半島霞の如く、伊豆七島
海に浮かんで、緑の紙に
點打ちたるが如し。遠
州灘は遠く、駿河灣は近
く、箱根・愛鷹の諸山は恰
も箱庭を見るが如し。

聞えしよれも

思ひしよりも

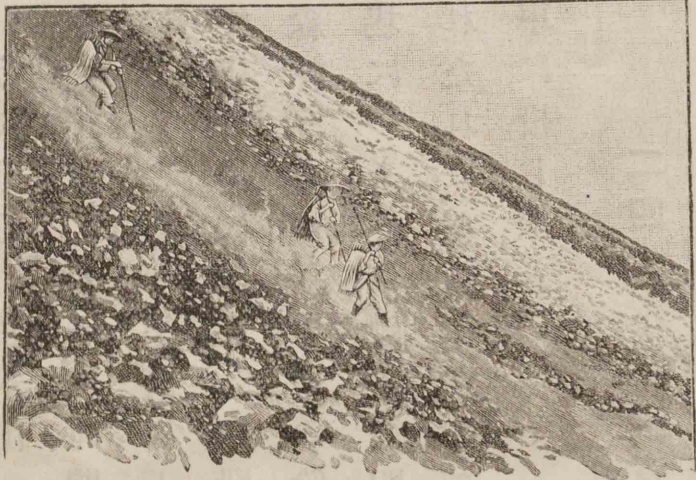
見しよりも、

のぼりて高き

山はふじね。

撮影

恰好



面の砂子にして走り下るには恰好の傾斜なり。三

足の草鞋をはきて、一步一步に滑りつゝ、轉び落つるやうに下る。寶永山もまた、く間に後になりつ。ひた走りに走り、一時間許にして三合目につく。更に下ること一里許にして、太郎坊につき、馬車を雇うて御殿場に向ふ。御殿場まで三里餘、一里ばかりは森林うちつづき、その餘は田野うち開けたり。御殿場につきたるは午後四時。こゝにて登山隊は解かれたれば、余は東京なる親戚を訪はんために、上り列車に投じぬ。

二四 小話三章

百兩の夜具

古人の語に「中流失^ニ舟^{スレバ}一壺^セ千金^ト」といへることあり。俄なる折身の危きことを免るべきものあらんには、其の物は賤しくとも、千金にも尙易へがたき心地すべし。

火屑

何れの頃にかありけん、東都の大火に、老若男女四方に逃迷ひける折しも、夜風強くして、火屑は雨の脚よりも繁く、濃き烟渦巻きて、面を向くべきやうも無かりけり。

こゝに一人の男、百兩の金を手にして逃げけるが、また一人の男の、一枚の夜具を頭に被りて逃行くを

茶毘

見て、羨ましくや思ひけん、其の夜具買はん。」と言ひかくれば、幾何の價に買ふか。」と問ふ。「百兩に買はん。」といへば、然らば賣り申さん。」とて、夜具を渡し、百兩の金を引攫み、兩人先を争うて逃げたりけり。夜具持てる男は、是にて煙と火屑とを防ぎ、辛うじて逃延びたれど、百兩の金持てるは、煙に捲籠められて、息もつかれぬやうになりて、斃れたるまゝに、茶毘一片の煙となりぬとぞ。夜具一枚の代に百兩を惜しまざりしは、善く生命を惜しむものにやあらん。

鳴門の舟路

阿波・淡路の間なる鳴門の瀬戸を、舟にて押渡るこ

下知

と五十餘年になりて、舟人の頭とされる者ありけり。或人これに向ひて、「鳴門の舟路いかか。」と問ふに、「知らず。」と答へたり。問ふ者、此は心得ぬことなり。御身此の海を知らぬ事やあるべき。」舟人の頭いふ、「御不審はことわりなれども、斯く答ふるは舟人のおきてにて、誰に問はれても、いつも斯く申すこととなれり。鳴門は世に聞えたる波荒き所なれば、幾度ゆきかふとも、知れりとは思ふべからず。始めて乗り試みる時の如く思ひて、用心の上にも用心すべし。舟の鳴門にかゝりぬる時は、吾等舟人に下知して、「こゝは始めての舟路、鳴門の難處、舵はよきか、帆はよきか、荷物

の積方はよきか。』などいひつゝ、十分の用意したる後、舟を進むるためしなり。』と答へたりとぞ。世の中を渡るにも、此の舟人の頭の如く心せんには、危き事には逢はざらんかし。

文字の點畫

文字の點畫の誤は、折に觸れて大きなる過ともなること、今更いふまでもなし。假令、點畫の誤あらずとも、少しの運筆の勢の過不及にて、事によりては身の禍となることあるべし。

昔、下總古河の城主土井大炊頭の家臣に、右筆の役を勤めたりし人ありけり。主人より同列の諸侯へ

大炊頭

祿


贈る文の表書に、大炊頭と認めけるに、大炊の炊の字、筆勢のいさゝか餘りたるゆゑ、旁の上の方へ字畫延出でたれば、煩の字の草體にまぎれしを、心附かずして贈りけり。見る人、此は大わづらひの頭なり。』とて、腹をかゝへて笑ひけり。「かやうの字を書きて、外聞あしき事を仕出したる者は、右筆の役にはさし置くべからず。』とて、遂に其の祿をば離されにけり。尋常の文字ならんには、さまでの事もなかりしならん。煩の字義は、忌まはしきものなるにより、祿をさへ離さるゝ事となりぬ。筆畫を慎むべき一つのためしならんかし。

(細川潤次郎)

二五 路上の大石

昔、獨逸聯邦中の或君主が、民を誠めん爲に、一夜窃に人通りの多い市街の路上に一の大石を置いた。翌朝、或農夫が田舎から荷車を曳いて市に出て来て、此處を通りかゝつた。斯ういふ大石の路の上に置き放してあるのを見て、「これは市の恥辱である。」とつぶやきながら、別に取除かうともせず、荷車の石に觸れない様に傍によけて通つて行つた。間もなく立派な馬上の紳士が來かゝつた。馬は意外な街上の妨害物に驚いて跳ね上つたので、危く

微醺
跌く

落ちようとしたりした紳士は、街路取締の不行届を罵倒しながら、其のまゝ行き過ぎた。次いで、微醺を帯びた一人の軍人が通りかかつた。此の石に跌いて倒れた。起き上りながら、斯かる危険物を此のまゝにして置く不注意を怒りながら、其のまゝにして行き過ぎた。斯うして、石は誰も取除く者がないので、一箇月の餘も依然として其處に在つた。そこで、君主は市民を召集して、「此の大石は私が置いたのであるが、誰も取除ける者がいないから、自身に取除ける。」と宣告して、此の大石を動かされた。所が、其の下には一つの囊

と一枚の書付けがあつた。そして、その書付けには、「此の石を取除けたるものには此の囊を與へる。」といふ意が記してあつて、囊の中には寶石入の指環と金二十枚入つてゐた。

二六 ペンギン 一

南極の一夜は、遠山の雪から明ける。

七十幾日と續く永いく、一夜が、七月の初頃から明けかゝる。明けかゝるといふのは、正午頃北の方が少し薄明くなるだけのことと、月の下旬になつて日が始めて一寸出る。平地ではまだ丸で目に見え

山巔

呎尺を辨ぜず

乾坤

萬頃

ぬ頃にも、遠山の巔には一寸日光がさす。日がさすと、巔の雪が其の光を受けて、ぼろと紅に見える。此の紅に光る遠山の雪の外、大天地はまだ黒闇の鬼窟裏で、殆ど呎尺を辨ぜぬ鳥羽玉の闇だ。これが幾日幾十日か経つて、次第に光は麓に落ち、氷雪の上に落ちると、廓落たる乾坤此に全く明け放れて、一面皚々たる南極圏の朝ぼらけ、目も遙に續く萬頃の氷雪中に、遠近に聳ゆる大小さまさまの氷山は、様々に屈折する日の光を受けて、或は紅に、或は緑に、さては濃い紫に、薄い黄に照り映える。美しいなんと言ふばかりでない。愈、南極の夜が明けて春が來た。

春來らんとする南極の曉を待詫びて、何處からともなく北の方海を泳ぎ渡つて、此の南極圏に押寄せ
る一群の奇怪な鳥がある。これが氷の上に泳ぎ著
くと、さながら隊伍を組んだやうに打連れて、立つて
歩いて行く。

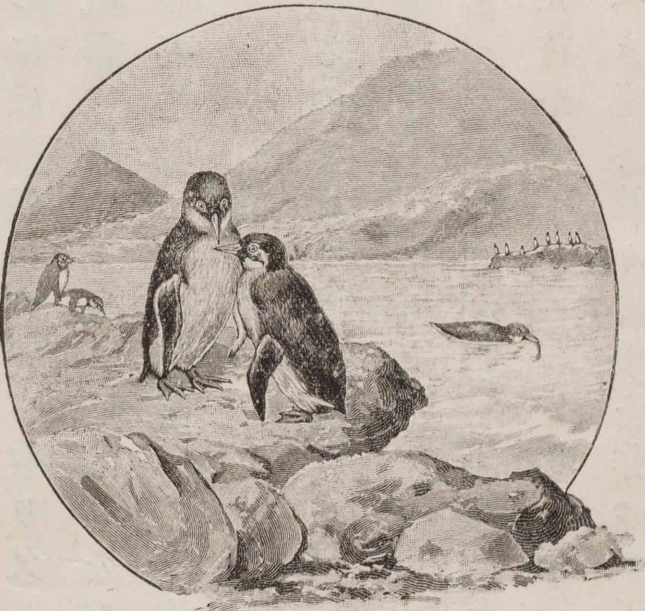
他でもない、これはペンギンである。

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にした者は無
い。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに
兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には
黒腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩の翼が短く垂
れてゐる。翼といつても、短いからこれで飛ぶ譯に

短褐

行かぬ。唯時々これをふたくくと上下に叩いて、一
つには身體の調子を取り、又一つには敵と戦ふ時の
武器に使ふ。見た所は、さながら小作りの人間が黒
の燕尾服に白の短褐、白の洋袴で、兩手を振つて歩く
やうだ。或種のペンギンは丁度襟の處に黒い線が
あるので、丸で黒の襟飾を締めたやうにも見える。
人間に似た處はこればかりでは無い。ペンギン
とペンギンとが出會ふ時は、互にお時儀をするやう
に首を下げる。春先此の南極圏へ移つて來て、然る
べき處へ銘々の巢を作つて了へば、農閑の伊勢詣り
とでもいふ風に、團體を組んで旅行に出かける。其

制裁



の出かける時は、一羽の總指揮官があつて、一同は其の命に従つて連れ立つて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間に何等かの社會的制裁が行はれてゐると見えて、餘り甚だしい喧嘩はしない。中には近

義俠心

所に親を失つたみなし子鳥が、心細げに巢に取殘されて暮らしてゐるのを見ると、自分の手に引取つて養育一切の世話をやくといふ義俠心に富んだものがある。又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白い所が一寸でも泥に汚れてゐると、仲間の鳥共が例の人を馬鹿にしたやうな顔を見あはせて、互に嘲り合ふ。此處等も頗る人間に似てゐる。善惡共に人間に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すに忍びなかつたと、探檢家ノルデン^{*}シヨルドも言つてゐる。種類は色々あるが、其の立つて歩く事は一である。翼が小さくて飛ぶことの出來ぬ者が、何うして海を隔てた

一瀉千里の
櫓勢

北の方から渡つて来るかといふと、前にも言つた通り泳いで来るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止まる。泳ぐに脚を使はぬことは、ボルヒグレウイングが兩脚に繩をつけて小舟を曳かせた時、平氣で泳いで行つたといふので知れる。水では泳ぐが陸では歩く。所で敵に追ひ掛けられたとか何とかで、大急ぎに駆け出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這ひになつて、一瀉千里の勢で、櫓の様に氷の上を滑り走る。其の迅い事は到底人間業では追ひつげぬ位である。ペンギンは平常はおとなしい平和

な鳥であるが、いざ喧嘩となると中々強い。嘴でつつく、脚で蹴る。例の短い翼でひつ叩く。犬などは屢負ける。ひどく翼で叩かれると、人間の腕位は折れるといふ。

二七 ペンギン 二

ペンギンは可愛い恰好の鳥である上に、其の容貌・動作が、如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。第一に、人を人も恐れず、丸で友達のやうに人の側へ寄つて来て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢で之を聽

無聊

きに來る。さうして互に顔を見あはせて、如何にも感に堪へぬやうな顔をし合ふ。それに又容易に人に馴れて、現にシヤツクルトン一行中のマレーといふ人が、之を二羽捕つて來て、名をつけ餌を與へて愛養してゐたが、可愛い哉、彼等は腹がへるとマレーの指をつゝきに來る。遠くに遊びに出てゐても、名をさへ呼べば飛んで歸り、マレー一たび外に出づれば、二羽ともひよこひよここと尻を振立てて、ひたもの其の後を追ひまはして、ついて行かねば承知しなかつたといふ。

近頃よく「をさまつてゐる」といふ言葉を使ふ人が

あるが、ペンギンの容態は、此の「をさまつてゐる」の一語につきる。ペンギンほど大をさまりにをさまつた者は餘りあるまい。僕の見たのはアデリー種の一尺位のものであつたが、例の燕尾服・白短褐ですまし返つて、水際をうるついてゐる所は、いやはや呑みこんだものであつた。身の丈三尺もあるといふエムベロル種のをさまり方が思ひやられる。又況や第三紀層のペンギンの枯骨は、人間ほどの大ききさであつたといふから、其の時のをさまり方も想像に餘りある。

ペンギンはめつたに他と争はぬ。人間に對して

胡亂

も犬に對しても、格別恐れもせず、又格別手むかひもせぬ。ペンギンの植民地の中へ人間がのさくくと歩いて行つても、孰れも一向平氣で、新種のペンギンが來たとでも思つてゐるらしい様子だ。偶、人が相手にしようとしても、ペンギンは其のぎよろりとした眼玉を光らせて、胡亂臭さうに人の顔を見つめながら、おづくくと後じさりをするだけである。ペンギンの群つた中を故意に疾走するとか、又はペンギンの體に手を觸れるとかすると、流石に驚いて飛び立つことがある。

何分氷雪の外に見る物の無い處とて、よくく無

聊に苦しむものと見えて、何かかはつた事があると、ペンギン共隨分遠方まで見に來る。大勢で來る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。シヤツクルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建てたりしてゐるのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに熱心に見に來たといふ。

大勢連れのペンギンが、途中ペンギンか人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立止る。先づ一行中の雄が一羽出て來て、恭しく首を下げる。

臺詞

や、伏目になつて何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には唯カ、ガア／＼と聞えるばかりである。挨拶の臺詞終つて後、始めて首を舉げて此度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫がいて、さてひよつと人の顔を見る。「おわかりになりましたか。」と言ふ風だ。

元よりおわかりになるべき筈の者で無い。人間はぼかんとして立つた儘だ。此に於てペンギンは分らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長々と繰返す。夫でも分らぬと見たら、此度は他のペンギン共がガヤ／＼言つて承知しない。其處で前に挨拶

挨拶に出た奴は、大いに面目を失つたさまで引き下ると、此度は代り合つて別の雄鳥が出て来て、又前のと同じカ、ガア／＼をやる。

相手が人間なら、譯のわからぬ長臺詞も、面白半分我慢して聞いてやるが、是が犬でもあつたら夫こそ騒ぎだ。シャツクルトンの書中に在る話だが、或時ペンギン共、右の順序で犬に挨拶をしたが、元より犬にわからぬ筈はない。そこでペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカ、ガア／＼をやり出した。犬は面食つてわん／＼と吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。これを見てゐた

人は孰れも腹を抱へたといふ。

(杉村楚人冠)

二八 會 得

高等學校に居た頃、少しばかり僕は柔術を稽古した。或日僕は某とか云ふ黒帯の先生と組んだ。習つた術をいろく、應用して居る内、僕はドタンと仰向に倒された。起上らうとする途端、先生は僕の右手を抱へ込み、仰向になつて、僕の胸の上へ斜にのつてしまつた。先生は肥つた人であるが、體は綿のやうに軽い。軽いけれども奈何しても押除けることが出来ぬ。足で疊を蹴つて起きようとしても無効

焦慮

だ。焦慮つて體を動かすと、先生の體も従つて動く。二人の體はX字形をなした儘で、グルく、疊の上を廻るばかりである。

やがて先生は體を外して、自分が下になり、僕をして先生がやつたやうに上に乗らせて、「斯う壓さへられた時には、斯うすれば起きられる。」と云ひ様グルリと起きると、忽ち僕が下になつた。これから此の起きる法を學ぶ爲に、前の通り先生に壓さへられ、先生のやつたやうに起きようと試みた。「無効だ。」と先生は大喝した。「自分ばかり起きようとするから無効だ。我と敵と一體になつて起きれば譯無い。」僕は

汗を流して屢試みる内、熟練したのか、疲れた爲か、全く我を忘れて、夢の如く起上る。「然うだ。」と先生が言つた時、僕は先生の大きな體の上になつて居たのである。「身を棄ててこそ浮かぶ瀬もあれ。」と云ふことは此所です。今の心持を忘れちやいけませんよ。」と先生が言つた。

其の後屢試みたが、實に譯なく起きられる。今は其の術の名なんか忘れてしまつたが、起上る時の心持はよく覚えて居る。其の時に僕は其の術を會得したと共に、會得といふことの意味をも始めて會得した。「我と敵と一體になる。」身を棄ててこそ浮かぶ

偶然

明晰

諳記

瀬もあれ。」こんな語を何度聞いたつて何度讀んだつて、起上ることは出来ぬのだ。自ら敵と一體になり得、自ら身を棄て得た(其の時は殆ど偶然の如く爲し得るが常)その刹那に、この語を味はつて、ハツと思ふと、偶然爲し得た際の心の情態、體の情態が、正確に明晰に意識され、其の意識は大磐石の如く胸に凝つて、永久小動ぎもしない。會得したといふことはこの情態を云ふのである。文字に依つてのみ事を知らんとする輩は、前記の語を諳記して、敵を組み伏せようとする者ではあるまいか。

(沼波武夫)

二九 無言の教訓

僕がうまれた村の中央に天龍川が流れて居る。其の一支流に大千瀬川といふのがある。毎年四月の初から五月の終にかけて、その兩岸には桃・櫻などいろくゝの花が咲き亂れる。田舎も都會と變りなく、其の頃になると、上は村長から下は水飲百姓に至るまで、少くとも一日位は業を休んで、大千瀬川の花を樂しむのが常である。

時は明治四十一年四月の末の一日の正午時分であつた。村人は少時の食事の休に、一同川岸に集つ

攀づ

蒼し

て、花を話題に面白さうに語り合つて居た。折しも六つ七つ位の可愛らしい子供が三人、蒲公英の花の集め競をして居たが、やがて其の中の一人が川に臨んだ崖の上の花を取らうとして、險しい斷崖を攀ぢ登り始めた。一同は之を見て「あぶない、あぶない」と叫んだが、もう遅かつた。攫まつた柳の枝が折れたので、今芽をふいた蒼い枝を握つたまま、其の子は川の中にざんぶとばかり落ち込んだ。

天龍の支流とはいふものの、流は早し、深さも大の男の丈の立たぬ位はある。僅か六つ七つの子供が、これに陥つて、どうして助かることが出来よう。而

も天龍の本流に合するに早間もない處の事である。人々は唯わい／＼と騒ぐのみで、誰一人飛込んで助けようとする者もない。その間に子供は次第に流れて行く。僕は見かねて、足場のよい流の静かな處を見はからつて、そこへ來たら飛込んで助けようと著物を脱いで待つて居た。やがて子供の浮きつ沈みつ近づいて來たのを見て、さあ飛込まうとあせつたが、帶のあたりを何者かが攫まへて居るやうで、どうしても飛込むことが出來ない。やがて子供は僕の前を歩き過ぎた。僕は尙助けよう、助けよう。」と思つてそれを追つて川を下る。子供はもう天龍の本

嘆聲

流に入りさうである。それでも僕はまだ飛込むことが出來ぬ。他の人も僕の後を追つて來たが、唯がつかりしたやうな嘆聲を放つて、もう助かるまいと切りに氣を揉んで居るばかりである。

其の時、六十を越えたらしい一人の老人が、着物をきたまゝ、荒波の逆まく川の中に飛込んだ。老人は一所懸命拔手をきつて子供を追つかける。やがて老人は子供を攫まへたが、それと同時に、天龍川の渦の中に捲込まれた。一同はどうしたものかと墜唾をのんで、胸をどき／＼させて居る。しばらくして僕の足下の岩陰に老人の手が出て來た。僕は力を

勝

込めて其の手を取つて引上げた。見れば彼は子供の帯を首に固く結びつけて、切りにこれをこれをと勝で其の帯を指すのであつた。其の帯を引くと氣絶した子供の身體が上つて來た。かくして子供はその貴重なる一命を老人に助けられた。老人は一同の感謝を只無言で受けて居た。

僕はこれで安心したものの、堪へ難い恥を覺えて、こつそりと家へ歸つて寢てしまつた。併しどうしても眠られない。道を通る人の今日の出來事を話すのが耳に入ると、實に穴へでも入りたいやうな氣がした。斯様にしてその日は眠ることも出來なかつたのみならず、夕飯さへ食べられなかつた。

是は今より數年前に起つた事件であるが、僕の心には今も猶昨日のやうに思はれる。僕は時々考へる、あれは僕が脚氣の爲に歸省して居た時であつた。而して年は既に十四歳で、水泳も少しは心得てゐた。それでどうして川に飛込んで救ふ事が出來なかつたであらう。僕は小學校に入つてから、ウォシントンが川に流るゝ子供を助けた話を聞いた。他の偉い人達の義勇の話も聞かされて居る。それなのに、どうしてもあの時は川の中に飛込むことが出來なかつた。然るに、あの時子供を助けた老人は、只十分

愧死

間の無言の教訓で、僕をして愧死せしめ、今後再び斯かる場合にあはば、身命を捨てて川の中に飛込まると誓はしめた。是こそ實に生きた眞の教訓である。年々歳々、花は四月になれば必ず咲く。行く川の流は絶えず動いて居る。此の花を見、此の流を見る度に、僕は此の老人の當時の有様を目の前に浮かべて、且恥ぢ、且生れ變つたやうな心持になるのである。言はば、僕は四月になると、毎年、勇氣を含んだ赤子として生れ變るのである。

僕は老人が命がけの教訓によつて、新しい生命を吹込まれた。命がけてなければ活きた教訓は出来

ぬといふことを教へられた。

(作文三十三講)

中等新讀本 卷一 終

註釋 (卷一)

〔抽出した語句の下の括弧内の数字は、巻中の頁を示したものである。〕

- スミス氏(二三)アイト、スミス、米國の飛行家。二度我が國に來り、諸所で飛行の妙技を我が國人に見せた。
- 鴻の臺(二七)千葉縣東葛飾郡。
- アレクサンドル大王(三三)マケドニア王フィリポの子。ギリシャ・エジプト・ペルシャ・印度等を征服した英雄。(紀元三五六一三三三)
- マケドニア王フィリポ(三四)アレクサンドル大王の父。マケドニアは今の土耳其帝國の邊に廣がつてゐた大きな昔の王國。
- アリストテレス(三八)古代希臘の有名な學者。(紀元前三八四—三二二)
- ホメロス(三八)有名な古代希臘の詩人。紀元前八五〇頃の人。
- スワロフ(四一)露西亞の戦艦、排水量一三五一六噸。日本海海戦の際、ロジエストウエンスキイ提督の旗艦であつたが、二十七日の晝戦に沖の島

北方で沈没した。

- バルチック艦隊(四二)露國が東洋に送つた第二第三太平洋艦隊を合はせていふ。戦艦八、装甲巡洋艦三、装甲海防艦三、巡洋艦六、驅逐艦特務船各九、計三十八隻より成り、ロジエストウエンスキイ中將がその司令長官であつた。
- ロジエストウエンスキイ中將(四二)露國海軍中將、前項前々項參照。
- ブイヌイ(四八)露國驅逐艦。排水量三五〇噸。二十八日汽罐破損のため沈没した。乗員七十餘名我が軍の捕虜となつた。
- ウラー(五〇)我が國で「萬歲」と叫ぶが如きもの。
- 廣瀬中佐(五一)名は武夫、大分縣の人。海軍中佐。日露戦争の時旅順口閉塞に行つて、三回目に花々しい戦死を遂げた。年三十七。
- 杉野兵曹長(五二)名は孫七、三重縣の人。廣瀬中佐と共に戦死した。
- 松平信綱(五四)川越の城主、徳川家光の重臣。伊豆守で智者であつたから、智慧伊豆と呼ばれた。寛文二年に六十七歳で死んだ。

- 大河内金兵衛元綱(五五) 三河國寺津の領主。
- 正綱(五五) 家康・秀忠・家光三代に仕へた人。
- 大猷院殿(五五) 徳川三代將軍家光の戒名。
- 台徳院殿(五六) 徳川二代將軍秀忠の戒名。
- 竹千代君(五七) 徳川家光の幼名。
- 明暦の火災(五八) 明暦三年に起つた江戸の大火死者十萬八千餘人あつたと傳へる。
- 由井正雪(五八) 兵法家。慶安四年駿河で亂を起さうとして、幕吏に捕はれようとして自殺した。
- ボストン(五九) 米國マサチューセツツ州の一市。
- フィリッピン島(五九) 米國に屬す。首府はマニラ。ルゾン・ミンダナオ・サマル其の他の諸島より成る。
- ボルネオ(五九) 新嘉坡の東方に在る大島。人種はマレー種。
- セレベス(五九) ボルネオ島の東方に在る島。和蘭領。人種はマレー種。
- マカツサル海峽(六〇) ボルネオ島とセレベス島の間、平均の廣さ一一五哩。
- 瓜哇島(六四) ボルネオ島の南方に在る島。和蘭領

- 首府はバタビヤ。住民マレー種。
- 馬尼刺(六四) 比律賓群島中の呂宋島にある都。フィリッピン群島の首府。煙草の産地。人口二十四萬餘。
- バーク(六四) 小帆船。英語。
- 呂宋島(六四) フィリッピン群島の最大島。
- 端艇吊柱(六五) ポート掛け。ポートを吊上げる柱。ポルトダヴィットは英語。
- 水先魚(六五) バイロットフィッシュは英語。魚群の先に立つて案内する魚。
- 鉤(六七) フックは英語、釣針のこと。
- 老水夫(六七) ボイスンは又ポルトスウェーデン、英語。水夫長のこと。
- 鎖(六七) くさり。チェーンは英語。
- 綱(六八) ロープは英語で、綱をいふ。
- 手擦(七一) レールは英語で、手擦の欄。
- 橋梯(七一) 橋から諸方へ張つてある綱。リギンは英語。
- 滑車(七一) 重いものを船に引上げる滑車。ブロックは英語。

- キャプスタン、バー(七二) 錨を卷上げる機械の横木。英語。
- シナイフ(七三) 海員の持つ小刀。英語。
- 黒田清隆(七五) 伯爵陸軍中將、鹿兒島人。開拓使長官・農商務大臣・總理大臣・樞密院議長等に歴任した。明治三十三年薨去年六十一
- 桐野利秋(七六) 陸軍少將、鹿兒島人。維新の際功があつたが、明治十年西郷隆盛の軍に従ひ、城山に戦死した。
- 別府新助(七七) 陸軍少佐、鹿兒島人、明治十年西郷隆盛に従つて叛し戦死した。
- ヲシントン政府(一一三) ヲシントン府にある北米合衆國政府。
- 探檢家のノルデンシヨルド(一三九) スウェーデンの北極探檢家(一八三一)
- ボルヒグレウイング(一四〇) ノルウェーの人、南極探檢家。

大正十年十月廿七日印
 大正十年十月三十日發
 大正十一年一月廿七日訂正
 大正十一年一月卅日再版發



發行所

印刷行

著者

發行兼
印刷者

藤

村

作

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座 東京二一九番

各府縣下特約販賣所

中等新讀本 附

價 定	
卷一	金參拾七錢
卷二	金參拾六錢
卷三	金參拾四錢
卷四	金參拾貳錢
卷五	金參拾貳錢
卷六	金參拾參錢
卷七	金參拾參錢
卷八	金參拾參錢
卷九	金參拾貳錢
卷十	金參拾貳錢

大正十三年度
 特定備金六拾七錢

第一卷 北 張

林

